てるひ

宇治巻　九

詞を名とせり

[V. 53]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 53
Copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551302

蓋廿四戈の丟より廿五ノ丟まで丟

そのころ横川(よ)にあるまがし僧都(そうづ)とかいひて、いと
ようとうさ人にてこそり。やそぢあまりの母(大尼ミ)、又十(いそぢ)ばかり
のいまうと(尼光)をなり。ふるき乳(ぢゝん)ありて、ちゝをまゝう
でたり。むつましうやんごとなくせふでしのあざり
をそへて、仏経くやうずることをこなひなり。ことごとも
聞くまでへるこちにあらざりといふ山こえ
けるほどよりこのもくのあま(大尼)ぞこちあしうし
それがくていいでゝのこりのこちをもおもし
つんともてさはぎてうぢのもとりにまゐりたり
けるへの家ありけるにとじめて、そふだらりやもめ
なるに、れいたうけづらへば横川(よかは)にをうそこにたり。

山ごもりの日はつくごとしはいでどと。さはれど。
限のさ波ちかきおやのこゝちの宮まてちかくやちかきんと
おぼろこそ。いそこざれしまへり。おもしむべくも
わろき人のさ波をこそげしまでの中よ。げん
あらしてぐちしきるぐを家あるじこそごろく
けさうじあけろど。いろうおいまへる人のとまく
おやこ給はいぐどとえろめるげゆそいひそれば。
さもいふべきさうとらいとおもしうせそ。いとをきげく
むつしうもあればきやうかてなかべきさまおもす袖
かさぐりて。れいすゑ給ふくさもいひべかりければ。故に
朱雀院の御名まで。宇治の院といひし所は。山ひつくり

ちらんとしひいでゝ。院寺（のんもう）。僧都しりぬへりけれど。
一二日やどらんといひまやまゐへりけれど。かゝり
きまちん昨日これ来りまけるて。いとおやしさ
宿もりのおされとよびてゐてきたり。おりしまさバ（右寺詞）
やいたづらなる院のしん殿（でん）まこそ侍めれ。地まうでの
人ハつゐまぞやどり給といへど。いと（僧都詞）ようなり。おほ
やけどころなれど。人もなく心やすきととて。こをま
やまゐ給。これ（右寺）おされ。れいもかくやどる人をこちらひ
たりけれバ。そろそろなるしひなどしてきたり
先僧都（まづそうづ）けたり給。いと（僧都公）いたくあれておそろしげなる
所なるとこゝまて。ぢ（詞）とこゝち程よめなどの給。この

もつきまそひとりしあざりとおもじやうなる
い夜ひとりおるまごとのあるまかつきぐしき程の
下げらう法師に火とも さきて人もよらぬうしろの
うしまいさうり。もりかとこゆる木のしたをうと
ましげのひとりやとこ入たるましろきものひろ
ごりこるぞこゆかれハ何ぞと立とまりて火を行
かくなしてこれバものゝねたるをがこなりさつ○の
変化(へんげ)したるかまくしこあらハさんとてひとりは
いますうしあゆこよろいまひとりハあなようなに
かしぬもれなるんといひて。さやうのもれしぞく
べきおんつくりつく。さすがにな紙まもりかしら志

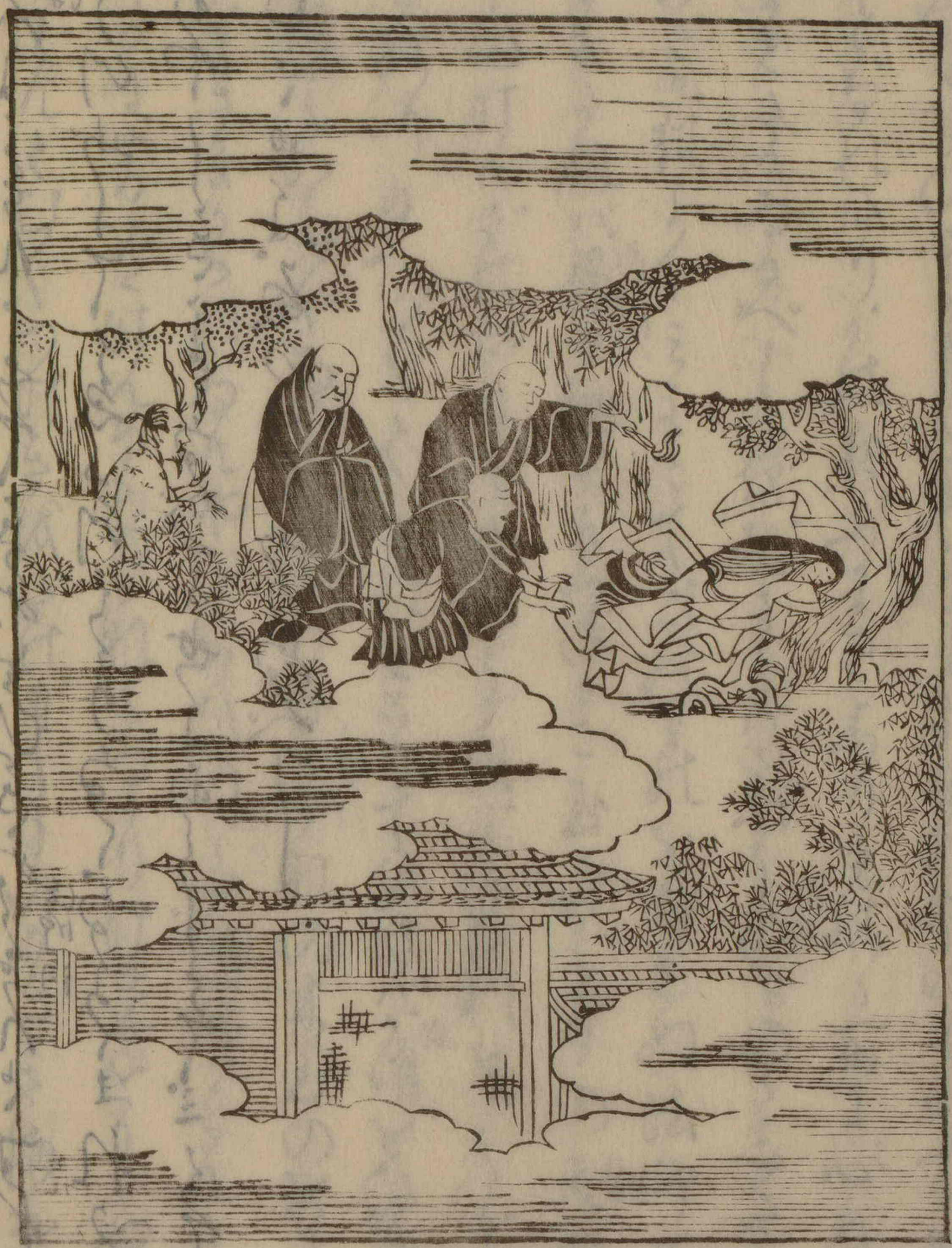
うえあらはふきりぬべき心ちするは。これ火とも
しろ犬とこ。たゞかりもなくあふなきさ海にてちか
くよりて。そのさ海をこれバかゝはなぐけやく
さして。犬なる木の根(ね)のいとあらくしきよりぬ
ぬていえじうなく。めづらし(大と云)きことにもちべるかれ。
僧都の此坊(ごぼう)にはらんぎさせ給らがやといへば。げに(あざり詞)
あやしきことなりとて。ひとりはまうでく。かゝる
ことなどやまて。さつ(僧都詞)の人に変(つ)他(げ)せるとは芳より
さけど。まぶこゝぬ抱なりとて。けぎとありており寸。投(れ)
(凡夫を)けたり給はんとすることなるよりて。ぞもどもこれ
もらぐしきはこげし所など。あるべかしきこと

どもを。かろ口たりまはいそぐもれなりなれど。お
ふげまりなどしたるまたぐ四五人してこゝなり
抱をこうま。かたうこともなし。おやしうて叶志
うつりまでこう。とく我もあけたてなん。人かなま
ぞとこゝわらかさんと。心まさるべき言（きんごん）をよこ。官（ぬん）を
行くりて心こうま。しるくやはもふらん。これも人
なり。さらまひざうのかしからぬもれまあらず。よりて
（傍数詞）
こへ。なくなりたる人まはあらぬまこそあめれ。もし
しまたりける人をすてたりけるが。よこがへりたる
といふ。なまのさる人をかこれ院のうちまはそて
（法師とる詞）
ゆらん。たとひまことま人なりともこゝろ。こむやうの

もれくおざむきてとりもてきたらんにこそ侍らめ。
いとふびんにも侍かれ。けぶらひあるべき事にこそ
侍めれといひて。おりいる宿もりのおのこをよぶ。
山彦(びこ)のこゝろもいとおそろしおやしの(右守)さ後に
ひたいとしあげて出さたり。寝(法師詞)にハつゝさ女などや
まことに給。かゝることなんあるとてこすれバ。さつる(右雪詞)也
つゝうまつゝなり。これ其のもとになん。時ぐおや
しきつざなんし侍る。たとしの秋もこゝに
侍る人の子の。ふるゝだゝりに侍しをとりてまうで
さたりしかども。こなどろか寸侍さ。さて(法師詞)そのちぐこえ
志まやしましといへバ。いきて(右雪詞)侍りき。狐(きつね)ハさしそハ

人をさびやかぐことはもあらぬやいといふさ雨
いとなれたり。かれ和ふかき氣りもれ〻所に心を
よきたりなるべし。僧都さらばさやうのものゝ志たる
けざか。粮よくこゝよとて。これもれをぢきぬ法師を
よきたれば。鬼(法師詞)か神かきつゆかこむかがぐりの天(あめ)の
下のけんざれおりしますまは。えうれなしじ。
なれりぬへくときぬをとりてひけば。(浮)ゆとひき
いれていよくなく。(法師詞)いであなさがれの事むのさま
や。まさまかれなんやといひ川〻。ゆなたんと
すれは。芳をけんめもとられもなりけり。めをまくや
あらんとむくつけき代。これもしういかきさ雨を

人まことんとせて。さぬさひさぬかさんとすれば。
浮うけがして思ひたりなく。法師詞なりくまれく
おやしきことなべて世まあしじとて。三とて
じゝ思ふ。毎いたくかりぬべし



法師詞
くてをいたらだ。しまとてとぐりぬべし。うさ
のもとにしそいぐこめといふ。僧都詞まことの人の
うちちりぞれいのちしぬを。うくまてん
ことはいうじとしとあり。池にをよぐいを。山に
あく麻をぐるに。人りとしへられてしるんと
すりをつて。こすけざらんはいとうるしうるべし。
人の命久しうまじき物なれど。のうりの命
一二日をもおしまずはあるべからず。鬼(をに)にも神(かみ)にも
ゆやうぞられ。人におられ人にとりぞられても。
これよりこ後のしるをすべき物にてあれ。佛の
うるしぎしてくひぬべきくはあり。私心にましぐし

ゆをのまをちどして、さすけ心えん、つゐましぬべく
はいふかざりまあらずとのぬて、このだとうして
いづきいれさせ給ひ、でしどもいひぐしさけざ
れ、いうしけづらひ給人のれあたりまよりしぬ抱、
をとりいれて、けがしひあらずまきたまんとす
と、もどくもあり、又抱の変化（べんげ）まもあれ、めまふすく
いけり人を、うろ毎まうちうしちまをんはいふじ
きことなれば、ちど、心ごまいふ下をちどはいとさは
がしく、抱とうしていひちす抱なれば、人さはがし
うしぬうれのうしまちんふをうりける、れ（老母）ろる後
まをてあり給ほど、いうしろうしがり給とてのく

ものもう。もうしあげまりて。借銭乞詞 まつ人はいづかたより
めづらしひなふ。法師詞 なうなうくさうてこれをいふずい
さらし給はず。あまり拙はげざれはけり人は
こそといふぞ。いまとの尼君でて。仰すぞさふ。
借銭詞 まつかくのこと限あん。六千まあまりさし。先づる
ちう拙もとあへつりとの給。尼君 うちこくまつる。詞 とのが
出家人 ちまてとらし義ありさい。いやうあう人ぞ。まづその
さ願らんとちまさその給。借銭詞 さこのひとしのやさとどる
ちん給うさや你らんおかまいへぞ。尼君 いそごもりて
さろま人もよりつぞぞすぞさきこりそうやと
ワつりつしげあり浮 女の。しろさおやのさぬ一

かきね紅(元亨)のもゝ海ぞ　きゝろ(香)はいとゞうゝぞ
しらそおてなるけるひかぎりなし。こゝ我恋
なるしむせもめれ人りおりしらなめりとて。
なくくごぶちをいぶしていぶきいれさゝ。いな
まつらんともありさ海ゝぬ人はおそろしかんで
いぶきいれつ。いけ(浮)るやうにもあらで。さすがまめを
ほのまゝあげらるゝ。もれ(尼宗行)しまへや。いかなる人か
かくてはもれしまへるといへど。地(浮)おぼしめさ海
なり。湯(尼宗)さりてもづしすらひへなどするに。こゝ(浮)
よもりまゝ入やうなりかれば。中(尼宗心)いとゞきはさ
れとて。これ(羽)人なくぬめべし。かぢしまへとがん

これあぎりはいふ。されバましておやしき由緒あるひ
なりとハいへど。神などれ〳〵あまり程よそへていのち。
傍輩もさしのぞきて。いりまぞあまりれしうざぞと。
よくてうしてきんとの給へど。いとよはげなるさえ
まそゆくやうなれバ。えつき給ひしずろ姿げが
らひまこありてまづいふべきことゞもすずろいと
やんごとなき人まそ給めれ。きかまほしともうづま
やへきてさき給ちんどうしきこげざうなとひ
あへり。おれ彼人はさう寸ありぬ。ワづうりきことをぞ
おかあどうらうてあつ。屁ぞいおやのまづしひ給
よりも。此人をうけてこまち給ひあかそうち

つけまそひねたり。しらぬ人なれど。ことあれとまなう
おかしかれば。いとづくしまなきじとぞ。恨（うぎり）おつかひ
さはぎかり。さすがに時ぐめこあげなどして。泪の
つきも寸ながうしを。おな（尾志詞）心うや。いとじくなしと
しふ人のかたりに。仏のしちびきぬへると。世界ゆる
さ。ひなくなり給ひしが。中くなることをやおもはん。
さるべき契にてこそかくこそなしめ。なをいさくか和
の給へといひつゞくれど。（浮詞）うらうしていさむたり
とも。あやしきふようの人なり。人にこそでよろこの
河におきしいれまてくよと。いされしたまいふ。（尾志詞）まれ
まれもの給をしれしとしふに。おないとじや。いう

なれがりくの給ぞ。いかましてさる所にはおもし
けるぞさへども。抱(浮)もいとずぬぬ。男(尾宛詞)にもしさずな
どやあらんとてこれど。こしたことゆる所なく
こけてそれがおきましくなるしく。夜ことに人の心
まどしさんとて。出きたるかりの抱にやとうたがふ。
二日ばかりこもりゐて。かたりの人を行ひかぢすす
こゑこしず。おやしきことをしたまぐ。もつたりの
ドしちどの信頼につうまつりけるかくておりし
ますなりとてとゝひいでつるも。もれがたりなど
していふをさけば。故八宮(ドしノ詞)の北女(むすめ)。左大将(蓋)殿のうらひ
給しがことにちやこ給こともなくて。ぼつりにうれ

まへりとてさはぎ侍る。そのれさうそうの雛(ざうじ)すがた
はかうまつり侍るとて。嗤(きのふ)日はえ知り侍らざりしと
いふ。さやう(僧都ん)の人のこ夜しねを。罷(とま)のとりまて。ちうる
まやとしふまも。何こうくあるまれともあげえ候。
おやうくおそろしとあげて。人ぐよべこやれ(内ノ人詞)
火はしろことくしきさりしきもとてざりしと
いふ。ことは(下を詞)はしことそぎて。いかめしうも侍らざり
しといふ。けがしひたる人とて。立ちがらとひ出し
門。大(芸)物愛は(八)宴のれ。女(大ノ女)もちまへりしはうをまて。年
比まちまりぬる物は。これをいふまかしん。姫(女二)宴を
とさまりまて。よまことと心おもしきじなどいふ。おまぎ(大尾)

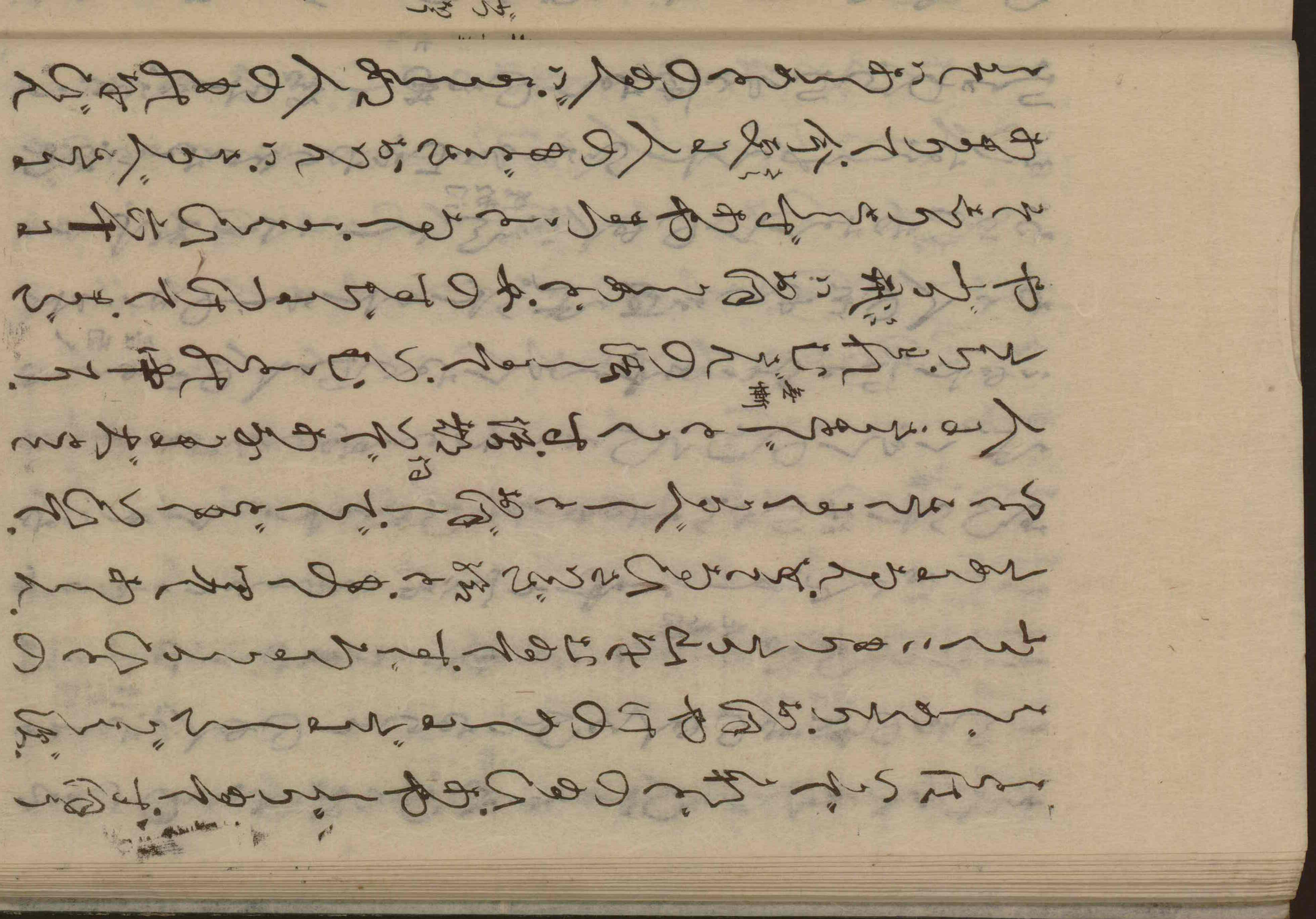
よろしくなりぬ。おもあきぬれがぐうしてあつ
ぬる。久しうめくもんもびんなしとてうへる。この人(浮)は
狂いとよもげなり。みちのほどもいぐものし給
えんいと心ぐるしさきとくいひあへり。車ふたり
しておいべのりこまへるまは。つうまりるほま
ふたりつぎのまは此人(浮)とふきて。うたはうまい面
ひきりのりそひて。ほとぐらし(ゆき)もやらず車とめて。
ゆきりなどし給。ひえ(大尼)ざうかまを聞といふ所まぞ
とうと給けり。そこまおりしつゝほどいとをしし。中
やどりとぞまふくべうりけるなどいひて。夜ふけて
おりしつきぬ。傍都はおや(大尼)とあつひ。むすめのあ面

君はこれ志しぬ人(俗)をもぐこそ。これいぐきおろ
しつやもむ。おい(大尼)の病(やまひ)のいけともなきがなしと
志ぬへし。とを(こち)のなぐりこそ志ぐしつづひ給
されやうくよろ志うなり給ふなれば。僧都(山)はの
ばりぬぬ。かゝる人なんぬてきたるなど。法しの
あたりまはよしぬことなれば。こぐりし人まは
まのぐず。尼君もこれくちぐるめきをひし。もし(尼元ん)鶯(ぶね)
ゝる人もやあるとしふもしづ心なし。いかでさる
ぬ中ぐのもむあたりよかゝる人おちあづれけん。
抱まうでなどしたりけゝ人のこちなどつづひ
けんを。まく母などやうの人のしがりてをきたる

まやあどぞせよりけり。河(かた)にあがしてまといひし
一言(こと)より得なる。地もさしまの給ふ○ぞいとおぼ
つかなくせていつしか人にもあしてこんとせつる。
つくぐとしておきあがらよもなくいとあやしう
のこものしゐへがづねまいくまじさ人にやと
おもひあがらうちすてんもいとおしういうじ。(長谷のこの)夢
がうりもし出て。どうじめよりいのしをしあざり
まも。きびやかなかしやくことをきせぬ。(祈禱二莽子を燒るのこと)打ちへて
あけかつ得どに。四五月もあぬいとまびしう
かひあきことをせまびて。僧都の此(まと)洋(文句)にちをおり
まてこの人にすけぬへさすがにかつまでもあるに。

しぬまじかりける人をつきしこゝかやうじこゝ
もれくさしぬまこそあめれ。おぼ（僧都と云之）ほけ家まいで給ひ
こそいわしめらくまでもあへちんなどいこじき
ことをうきひぐけて。まれぬへれば。いと（僧都心）あやしき
ことれ。かくまでもありける人の命をやがてうち
まてくましうば。さるべきちぎりまうてこそいれ（これ）我志
もこひけゝめ。こゝろこゝまうすけとてんかし。それは
とましぎは。ごうつきまそりとしもんとて。おり給
なり。よろこび（尼去）あがうて。月ごろのまさ夜をかゝる。
（羽）かくしうひづらふ人いむつしきことをのび
りしあるべきを。いさらおとろへぎ。いとこゝろ

げまもぢけたる所なくのこ抱し給ふてうざりこ
えしなぐしも。くていさたるけざなりけりなど。おほ
かぬほな。なくくのまへバ。ぞ(俗敷付)けしよりまゆづしら
なる人のれありさ雨かれ。いでとてさしのぞきて
こゐて。げまいとさやうさくなりけるへのはよりめ(呂面へ)
れ。くどくのむくひよこそ。かゝらうちりも
おひいで給けめ。いかなるこゝろひめまて。うくそこな
られ給ふん。もしさまやと男あくきこともな
しやさひ給。さしまさしまうこともなしなるは(尼老付)
もけをの親(ふゝん)者(そん)のまへるひとなりとのまへバ。なるよう(俗敷付)
それえんまさるがひてこそ。ひさ給ひめこゝろ。なるさ



ことはいかでかれどのあひおやしがりまて。ず得う
たじめたり。お得やけのめしまぐましたがら。
ふくこまりたる山をむまて。すぐろまうるひとの
ためまちん。をてちまひさいぎ給と。まのく罪てあらん。
いとまくまくうるべしとおぼしでしどもいひて。
人まさうまじとうく寸。僧都いであかりまださて
たち。まれむざんの法しまて。いむことれ中ゆり。
やぶる飛(かい)はお得うしあど。女のすぢまつけて。まぶ
そしりとしずおやまつことなし。よろひ六十ま
おまりて。今更(さら)ま人のもどきおりんに。さうべきま
しそはおしめとのあへばよりしぬ人のもれをびん

なくいひなし侍る時は佛法（ぶつぽう）のきずとなり侍る
ことなりと心よからずさていふ。これ修法（ぞほう）の程る
しるしそらずなど。いうじきことぞをちらひぬて。
夜ひとよかぢしのへるなり月は人（ようましまうつきく）まゝ事
うけして。何やうの抱く人をまどりしるぞと。
なりさ面ぢりいはきまゐしうて。弟子（でし）のあざり。
とりぐまかぢし給。月ごろはいたりもなりれ
ざうつゝものくけてうきられて。をのれ（抱のけり付）はこゝまで
まうできて。うくてうきられてまつるべき身にも
あらず。芳はとこちひきし法しのいさゝうちまゐ
世ようしらぬとぞめて。そぞよひありきし間ぞる。

よさ女のあまるすゝ給し所ますゝつきてうる
へいうしちひてしまこれ人（浮）いろろと世とうしゝ
あてけれいでしあるんといふとせよるひるの給
しまこよりとえていとくしき衆ひとりもれし
給しととりてしありされど親音（かりんとん）とぎ面うき面ま
もぐらき給さればこれ僧都まけてまつりぬ
とはまりあんとのしあるぞと
とへばつきこうひとまれとうるさけまやとかぐ
しくもいちずぼうじこのうちはさはやかり
いさくもれおぼしてこまりしこれがひとりこし
ひとれかはちくてこれ老法（おい）しゆゞこおとろへ

ゐり地のをあげられバ志しぬくまきまけうちち
していとりるし。おこし世のことをいづれど。すこ
けん取られといひし人とぞまこしかまりかぐ
しうもあげるぞ。こゝ我ハかぎりとてこをなぞし
人ぞりしいづくまきまけりまかと。きめてをいげ
れバいというじとあれをしるげきて。これ人のゐる
ましまつまぎをくるちてあたりしは風ちげ
志う川波あしう罪しをひとり地おそろしかし
ゞバさしかるに。これもあげしで。そのこのりしは
あしをさしおろしなるし。いくべきるもまどかれ
てかくりいくんもなるぞしまてこころづらくこの

世まうをなんとせたちしを。おこがましうて人は
こつけられんよりハ。鬼(とま)もなまもくひてうしなひ
てよとゆひけゝ。つくぐとゐたりしをいとまつけ
なる男(おとこ)のよりきて。いざぬへをのがもとへといひて。
いざくこゝちのをしを。家(白)とこそくし人の志給と
おぼしほどより。心ちまどひまけりなあり。しゝぬ
ところますへとさて。これおさしいきしうきぬと
しれ。つねまくほいのことも。すなりぬるとも
つゝいとじうなくとせし程よ。そのゝちのことは
こそていかまもくおぼしずひとれいふをきけど。
おほくの日比もへまなり。いかまうきき取をしゝぬ

人まあつかれえしつんとまづしう。つねり
りそいさかりぬりとおまふもちおしれば。
いそじうおぼして。なりくしづこぬ人ら回ごろは。
うけしごろもなきさ海にて。おれいさくりまいれ
こともまつる紙。露（つゆ）ぐらりのゆ紙ごままのしず。いか（尼言付）
なれバくこれもしげなくのこいおもしするぞ。うち
しんぬりこなどしこまへることはさめぬて。さは
やりまえしおんバうれしうせきしゆるとゝぬく
なくこゆむおりなくそひぬておつひ罪給。おる
人こもわたしき此き海りたちとこれバ。こころを
つかしてぞおしこ内もりけり。心（ぼん）にはなをいそで

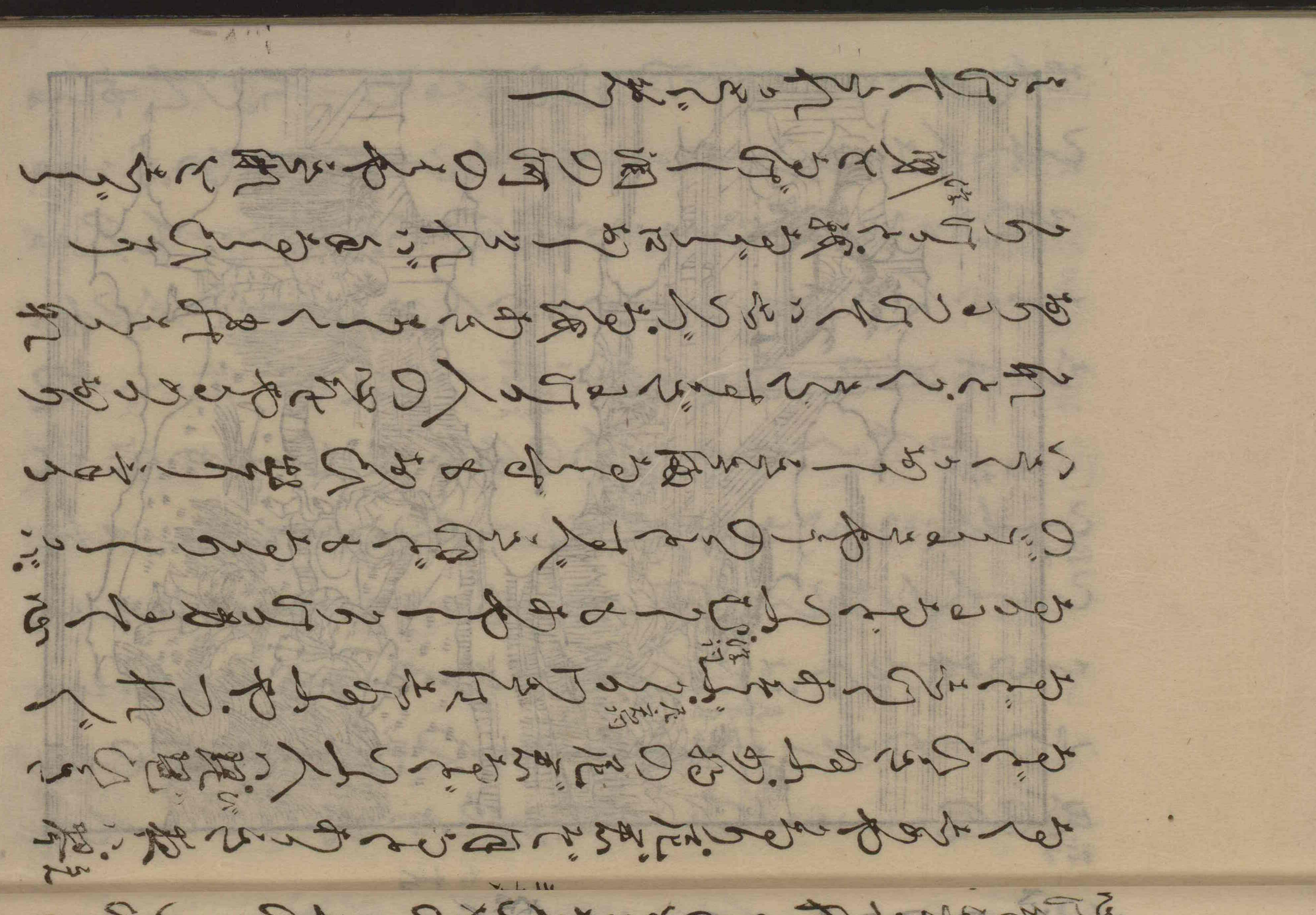
しるんとぞしけらりぬへど。さげりまて。いきと聞り
ろ人の命なれば。いとしうねんて。やうくしら
もしげしまへば。もれまいりなどし給ひて。中こ
ぬもやきもて山(ゆき)。いつしうとうれしうしゆる。
何(浮行)まるなしぬてよ。さてのこなんいくべうもある
べきとのぬへば。いと(尼君行)おしげなる御き聞を。いつでゝ
さはなしこそまつらんとて。こゞいつ(浮ノ)ぐきげりを
そぎ。又ういだりとうけさせこそまつる。こゝろもと
なれど。もとよりおれくしきへの心にて。えきう
しくしぬてものの給ひず。僧都(行)今ハかぐりにて。
いこもりやあらそまつりぬへといひをきて。のぐり

ぬぬ。夢（尼君）のやうなる人をみまうれと。尼君ハよろこび
てぞめて（ほと）おうしすへつ。ぬぐしまづくろづり給ぎば
りおさましうひきゆひてうちやりつれど。いとう
もこぐれず。ときこえてこれバつやくとけうらなり。
一年こゝぬけくもぐこゝ御ゆる所にてめもおやま
いこじき天人（そん）のおまくぐれるをこゝろんやうにせふ
もおやうさ心ちすれど。おぼ（尼君詞）ゆいと心うく。ゆゆりいこ
じくも罪ゆるゝ此心をへぐそくはえぬふ。いづくにこれ
と罪し人のさる所にはいりでおつもしぞともめて
とふをいと（浮ん）ちづしとせておや（詞）しりし程にこれ（言れ）
こうまやあんおりけんさ夜なども更に覚て侍らず。

さゞ目のうまさひいづことてはさゞいでは世を
あらじとせつゝ。多嘗ごとまりしちゝてなげめし
程ま。まへちゝく物はきるゝ其のきしきるより。
人のむきて。おそいく心ちなんせしそれより外の
ことは我ながら誰(れ)ともえさむられ侍らずとぞ
ちうさげまいひなして世中まなをありけり
といで人はきられじきつゝ人もあらばいとい
きうとてとてなゝ給おまりとふをくしと覚し
されば。えとゝぞ。かくや姫(ひめ)とゝつけたりけん。行さり
のおきれよりもめづらしき心ちすらまいかなるもあ
ひまはきしうもんとすらんとぞ心なくぞ覚し

けるこ(地)のあるじもあてなる人(大尼)なりけり。むすめの御ま
君は上(悪愛)遊ぶのかの方まで宿けるがその人(悪愛)なくなり
のそしのちむすめくぐひきりをいうじくくしづきて。
よき君遊をむこうしてしおつひけるとそのむすめ
の君のなくなりにければ。こころうしいうじとしいり
くぐちをもへかろ山里にはすまうじ給ふる
なりけり。世とくまに忘けるに人のうこえにも。しひ
うれ人はべかんん人なぐまこしがれとうれ
つれと心ばそこまくにしちげきけるをくぐ見ぬ
ひ(俘)とのぐちけるひも母さりぎ母なるなえられば
うつくのことくも見ぐずおやしき心ちしなぐうれ

しとしふ。尼去びなされどいとさしげまよしありて。
皆信もあてゐるなり。若(ほん)の山里よりハ。こづのをもも
なぐやかなり。川くりぎ後ゆへあり所のあぐちあも
しろく。前栽(せんざい)などもあしくゆへと川くしたり。秋は
なりゆけバ色のくしさも衰なりと。門田のいゐかり
とて。所をつけたりもれまゐびしつゝ。つき女だハ手
うたひけうじあへり。ひさ引なしすとともあしく。こ
しあづまぢなどのとなどもしむられて。夜夕(地)者(ぎり)
の家も所のおりもし山里よりハ今もそしいりて。山
よりたけたり前なれバ。松ばいしげく風のとともいと
心ぼそきまづれぐとをこなひをのこしけいと



思(浮ん)の月のまころうかれば。引き忍もうしろめ
たくうとましきまでおもひやしる。月のあ
かき夜なく。おいべ(尾忘を)どもいえんてりうゑよみ
いまへ出つゝ。さ夜ぐの抱がたりなどすりま。
いしゆべきうるもなれば。つくぐとうちながめて
(浮ん)
(浮)日れくてうき世の中まめぐりとも誰かは
しらん月のこやこゝる。今は限(うぎり)と思ひし程たゞひ
しさ人お月かりしかどこと人ぐはさしまいで
られどゝぐおやいまゝまどひ語かん。めれとよろづは
いでゝ人なるくまなきんと思いられしをいかゝ
あへなきこちしけん。いづこゝあらん。けれ世ま

あり抱とはいへでもしらん。おもしろうなり人も
なりしまゝよろげへぐつことなくかゝひ
こゝなれたりし。右をなどもありくはいでゝる。
けゝき人のかゝる山里は今はとしひ人こもりを。
かゝきけぎなりかれば。さぐいたくとしへはけ家
あま七八人ぞつゐのひとしてはけり。それらが娘(むすめ)
むまごやうのもれだ。家は家づ人すりも。ことざ海
まてありも。と記ぐぞきりよひけり。(ほん)やうの人は
つけて。こゝはりはいきりよひ。とのげりし世り
ありかりと。これはもくさられてまつらんこと。
いこじくとづしりべし。いりなりさ海まてさす

らへけんちまでもやまずおやしなうべからず
さへぶかる人ぐるまりけてもまぐず。地ぐず偽言ごまさき
とて。花君のけぶ人はおもうけるやうらせのまぞ。
られれかるまいひけうけり。浄心も心ぎ面も芳
ろし家ぐ帰に望ころとうしおるまでとまうけても
世中はあしぬ家をこれまやあんとぞ。門からね
あるれけり。地獄のまき人はさもれしものびやすへぶ。
悔ことるけづうりしうるべきゆ人ありひとまも
拘し給しんとて。くましとあろ人ぐまるせう
とずおまる君の芳のむこれ君。律あるそて拘し
給けり。おとうとれきんしの君僧都のれきとり

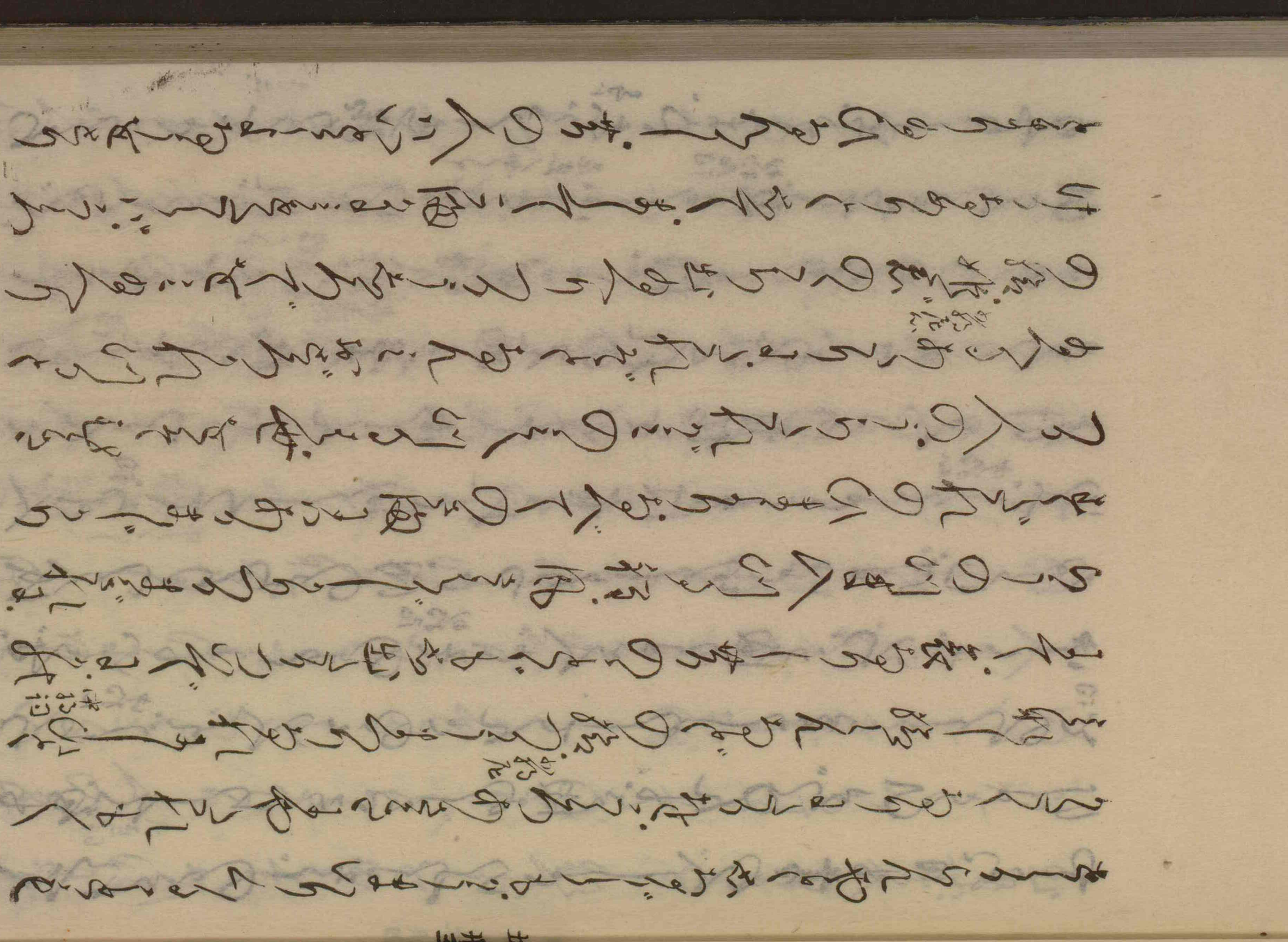
もれし給けり。山ごもりしたるをとゝひまゝ
ゝの君ざちつるまのぼりかり。横川(よかは)まゝよふ君の
さかりまゝまて。中将こゝまおりしかり。さ記うち
おひて。おてやかるおとこれいりくるを。(浮ん)いざし
て。きびやかまおもしきし人(白くろす)の此宵様けもひぞ。さや
かまさ出らく。(地)これもいと心ぼそきすまゐのつれ
づれなれど。すこうきこゝろ人ぐいもれきまげま
おりしうきなるして。かきほまうへこゝろなでしこも
おもしろく。をこれへしききやうなど。(さ記)咲もじめ
こゝろ。色々のりぎぬすゞこのをのこ。此のつゝき
おまゝして。(中将)さみもおなじさうぞくまて。これを

おもてまよびとへられがうち（中将）をぶめてねたり。
そし廿七八のほどまて。ねびさしのひ。心ちなかぬ
さ面もてつけたり。何ま君さうじぐちは事こそ
て。こいめんし給まづうちなきて。年比（尼宮詞）の門まり
まはゐましかるいとゞけど泣くのこなん侍りを。
山里のひかりまなれまちこそしさすかことのうち
忘どやこ侍らぬをかつはあやしくしぬふりと
のこまへば心（中将）のうち哀は。過（詞）ましかるのことゞも。
ゆへられぬありなきをあるがちはすこそなれ
がかなりれ有信はとてこりつゝなん。山ごもりを
うしやましうつゝはしたち侍りをおなじつゝはなど

志たひまどいさるく人ごまさ夜ふげしるやうは
侍てあるん。そふいこれもぶきすてくもれし侍つると
のおふ山（尼宏詞）ごもりのれうしやうは中くいまやうぶ
ちたうれもれまひびまるんむうしをおぼし志ぬ
れうろだへもよまるびうを給はざりけると。とろう
あらずせたまへらるゝありおほくなどいふ。人（池）ごま
といたんなどやうの抱くもを。君（中将）まもいすのこなど
やうのもれいぐしこればなれましあたりまて。
さやうのこともつくるきこうちして。ひし夜（さめ）の
ふり出るまとぶめくれて。抱紙志めやうましぬふ。
いふ（尼宏ん）ひなくなりまし人（尼ノ女）よりも。これ君（中将）の此心だん

などのいと物ふやうなりしを、よそのものは思
なしうなんいとうなしきなど口をれがるこ後
ごよとじめ給ひず成まけんと、恋志のぶ心なりそれば
之後さうまうくもれしぬへるまつけても、光づら
志く衰まねばゆべかめるまくまとはずがうり主
志いでけべし。ひめぎこいはれ紙と志出るかる
物ほくてなずめいぐしぬへるさ後いとうけうし。
志ろきひとへのいと情なくあざやぎくろまとう後
もひいぐさまなしひうまや光もそぐくろさ後
ときさてまつりされば、かうことじもこしまは
かりて、おやしうもあるれと志けしはく

しういらくぞうろもれどもきゝあへるしもいと
おかしきすがたなり（浮ノ）れまへなる人ども。こ姫ぎみの
おりしきろ心ちのこし給ふ。中将殿をさへこそて
まつれがいと哀ことそ。おなじくは芳のさ夜にて
おりしまさをばやいとよきれあそひなんかしと
いひあへる。（浮ん）あれいこじや。世をありていかゝ
いかゝも人をこしんとそ。それにつけてぞむかしの
ことも出てるべき。さやうのすぢにしてしかん
とさふ。おまぎ君いりあへるまゝ。（中将）聞らうと夜の気色を
こまづくひて。（中将尼之）かゝ（中将詞）といひし人のこゝろをさくしりて。
よびよをあへり。むかしし人ぞいこれこゝにまれ



のべりしなるは・まぐ〳〵しく志給めつとこゝろ
ひとつるをて・さまし・れこそまさなれぐくなく
さめゝののめりしほどくは・かほしめひとさえてぞ
まつりあそ・おけくれの見捨るを学え給めりとうち
とけの心ある御有様をいとぞ御心しつゝんと
いふ・かりつゝとしこそは有されとかしくてあまへ
なしむげはいとかしりつゝ・浮のうちりつゝ給
ゆくさいづ・う御のまさへどぞのまくまもいふを・
とのうちきこしめしてんとのといへど・うちつ
けまとをひとつんもさ御わしきこうちしてる御も
やゝめ目も業めべしといふはずのすぐれて

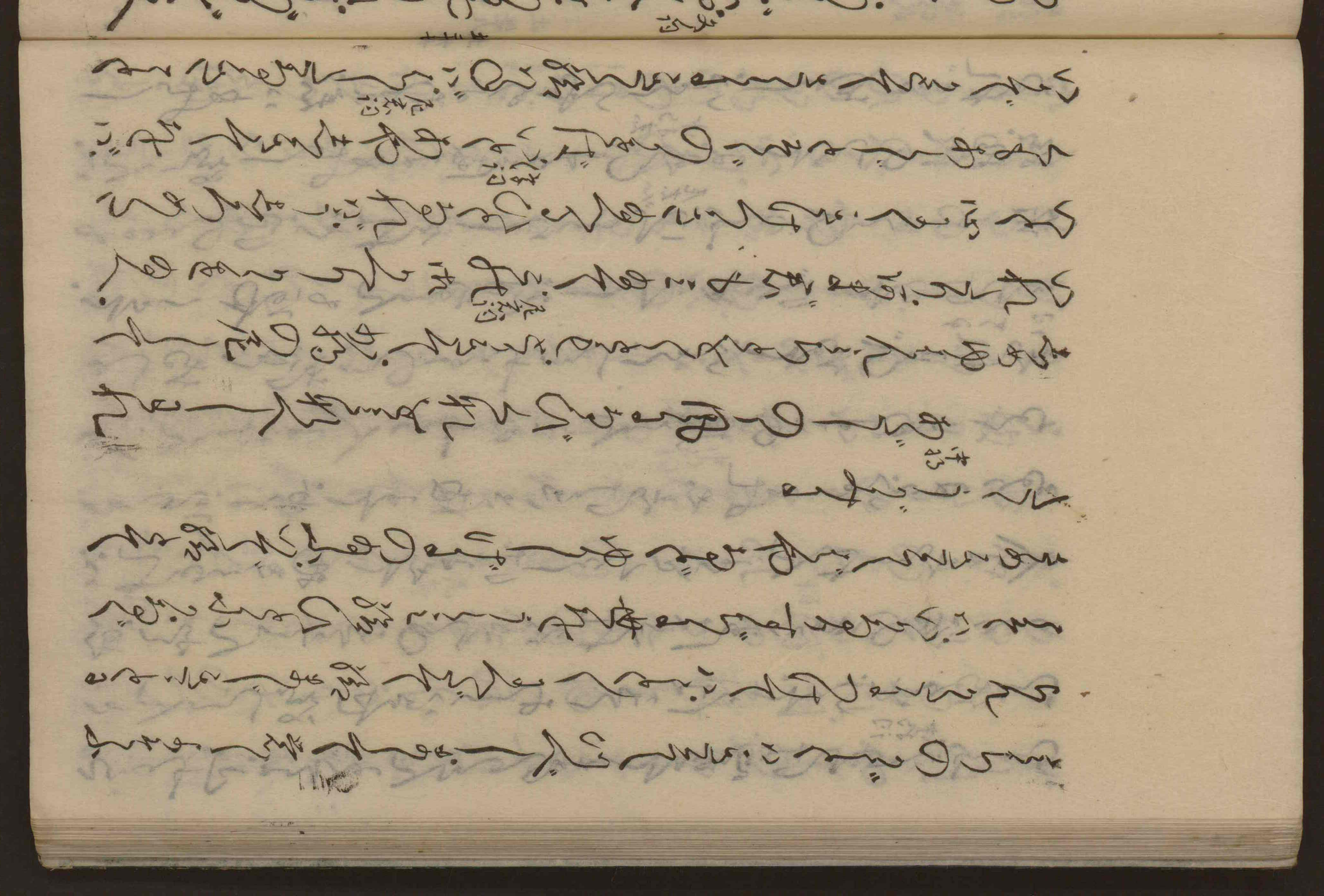
出ぬふまへちりさをとられへしをありて。なにはまれふ
らんとくちずさうそひさりごちうそり。人（尼君詞）のもれ
いひとさすがるあぼしとがせるこそなど。こゞいの
人どもハ拙めでとしあへりいとこさよげるゆゑ
ほしくもねびまさり給まけりれ。おなじくは
芳のやうまてもいふそまつらがやとて。藤中納言（御ともなし）の
れあるりまはこしずよひ給やうなれど。こゝろも
とゞめ給ふず。おやの愛がりまなんもれし給と
こそいふなれど。尼君ものゝて心うく（尼君詞）地（ほゝ）をのこ覚し
へぶそこうなんいとつらきいまはなをさらべきなか
めりと覚しなして。ぞれぐしくまてなしのへば

よとせ六年時のまも忘れず恋しかなしと思ける
人のうへもかくこそありて後よりはいとゞなく
忘れて侍りしが、さすがにあはれなる人にせらるゝかはりけるを
今は世をすてぬれ、ましてはやうしおぼしけり
めでめでよろげのことゞもあまりうらやうにては
えしもおしはかりあらんといひつけてもいとゞ
涙くもりてつらつらと心は侍しかど、おもやうくて
いさゝかつけのほどゞ、まよろげのこと夢のやうにて
さだめられておしめせらむまれうらんのとはりくら
心ちすゝんとおぼし侍れば、今はさるべきことせらる
あさんときも思ひこそのちこそせむつましくせ

きゝ申れとの給さ海もげ（尾宗心）にあるに心なくすゝかしく
うち思ふてぞ海まりねぬへる。中将は山にはたらし
つゝて。僧都も然づらしがりて。世中の物語志給。
その夜はとまりて。こゝ思ふこゝとき人ぐに。程なぐ
よまをて。夜ひとよあそび給。ぞんじ（中将ノ兄弟之）の志。こ海ゥ
なり物語などすゝついでに。小嘴（中将詞）にうちよりて。物
衣にも書しかれ。世（尾宗ノ文）をすてこれぞ。なをさづりの
心ぞをあり人かうこそなどありつゝでに。風の吹
あげこりつゝひまよりかゝいとなぐ。めりしげ
此人こそこゝうれ。おしはなりとやさつらん。こちて
あるゝにいりつゝうきちでおなべての人とはこゝ

ざり川さやうの所ゝ。よさ女はとさこうまじさ抱る
こそあめれ。明られこう抱は法しなり。をのづから
めなれて都ゆくん。おびんなりことぞかしとの給。
ぎんじの君。これ去ぐ川をまうでく。おやさく
ゑ出さるひとさなんさく侍しとて。こぬことなれば
こ度りまはいらず。衣なりけることかれいかなり人
ゐりあらん世中をうしとてぞさう所まはかられね
けんし。むし抱ぞのうちもすりかれとの給。
まるの日かへり給まも。迎がこくなんとて如くし
こりさうべき心づかひしこりかれば。芳也出こう
れまりなひのかれのあまなども。袖ぐち。さ海こと

なれどもありしいとにいやめるあまぎ志ハもれし
詞抽詞のついでに。遇（中村志）びたりさ夜にもれし詞んハ。
誰にうちひぬふ。けづらりし（尼志心）なれど。涯のうにも
こつけのてげりをかくしが涯なんもいやくそ。
忘れ（詞せり）にび侍ていとにつゝふうのゝ都ぎ侍つ
なぐさめにこの月どろこぬふる人にたなんいか
なりにかいとも此忘しげきさ夜にて世にいりと
人にしられんことをくるしげにして抱きられば。
かり谷のそこにはこれかたづるにきてんかと思
つて侍りをいでうはこさしあらはせ詞つんと
いふうちつけ（中村詞）心をてまのりそんにぞに山ふりさ



ぞらのかごとはきそしいべしまして覚しよそふ
らんかたまつけてはとくまへぞて給まじきことを
そはいかなりすぢまを世をうしこ給ひとふかなぐ
きめきそしぢやあどゆしげるのあふいぞ給とて
さくうがみる

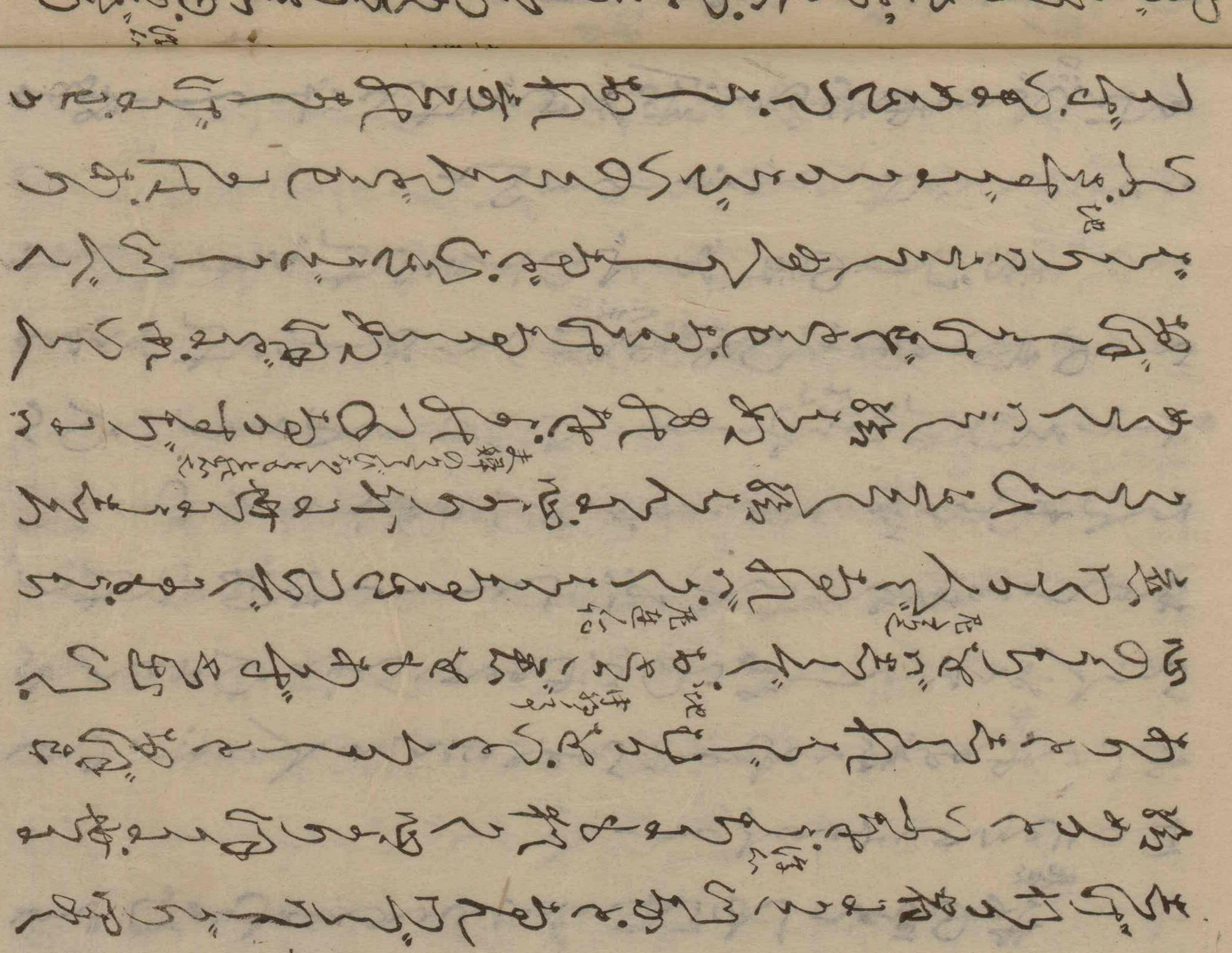
中将 あぢしの風まちびくれをこれへしまれ
志めゆきんぞらとをくともさりきて小将の尼して
いれたり河まぢもこめて尼忘詞 これはりりをめへ
いと心まくさけつさめへるひとなれがうしろめる
くもあしじとそぐのりをばいと侍詞 あやしきそをば
いかでかきてさしまきて給ひ○ばくしたまきこと 尼忘詞

ありとておまぶ君(文内)ゆえしさせつるやうまよづるぞ人
まくぬ人まてるん
尼宏
うけしうへて心こゝぐれぬをこれへしうき世
をこゝひく草の房まとありこゝろ(中ねん)はさもなりぬ
べしとゝゆりしてくりぬ文などひきやらんも
さすがうねくしう。ほのるゝしき海ハ忘ぞ
抽ゝらんすぢるるごとくしるゝど表るれば八月
十日おまりのほどまに小鷲(くり)がりのつゞでまかり
しるを

中将詞
御のおまよびせて一日ふしあそび給心ありて
あるじのまうけびとへすべくもおはせねばおほきみのすのつ
られ山のとあんとおもふるとひ出し給。中将尼君に　御へ渋ん
しのへるまゝも心詞　心ぐるしう國まてまかし給と
まく給し人のめうへあんのゆりゆしく侍りける
ぶとも心まくるそめ心ちのゝし侍れがやまずとも
そ侍しまほしき心有るがゆゑひ給あじき人ご
まゐらせりてあんぬし侍るがおほこちそげなる人の
うへいくらしさへのところゝゝやふきさらし
くし候なん。給せらん人はせぬとを見えずやあるが。
尼君詞
んそゞめくるさ彼よるゝしひ給。心ちすげなりぬれ

孫がひはきそしかりし給りんまつきなりしぬさ由
まなんえし侍れど例の人まていあらじとぞいと
うたてあるまで世紙恨え給めれば のそりすくなるを
よそひの人ざま今はそそむき侍る時はいとものの心
ぼそくおぼし侍し物紙世紙こめろうさうまていは
つねまいりぐとなんえまへ侍ると おやがりていふ
尼宍浮ノ方へ
いりても 訶 なさけなし なほ紙いさゝうまても罪ぬまへ
かゝれすまねはすぐろなることも衣しなこそ
よれつるのことなれなどこしらへていへど 浮訶 人ハ
まれきしゆらんかるもしらずなるまごともいふひ
なくのえこそとぞいとつれなくてかしまへり 中打 閑ら

とは。いづらあな心う。秋をちぎれるはすうし給ま
こそありけれなど。うしろ
（守約）
恵むしの声をぞきてきつれども又おぼ
いらの露ままどひぬ。おれ（尾宗詞）いとあし。これをぞま
ちどをむれば。さやうまよろいこんこと。いひい
でんもいと心うく。まるいひそめてもかやう乃
ありくまをめられんも。むつしうおぼゆれば。
いくへをぞうし給ひ。おまりいふひなくさ
あへり。おまぞもやうにいまめきたる人まぞあり
けるちぞりなすべし
（尾宗）
秋の明くつゆけきたるりころもむぐら



やぐやしきどもはいとうしろめたう見ゆ。かぎり
なくうき身なりけりとこそてくし命さへおさ
ましうなげくていかゞ女さ海にさしらふべきなるん。
ひとふりになるさ抱とぐへにさしすてられても
やこれぞやと。おぼしまへるに。中ねは大なるも此心
もしこそこのきにやいというちなげさつく。
志のびやうにふえを吹なして。麻のなく音に
なぐひとりぐけけひ。海ことに四ちなくはあり
まし。通ましうるのさしらくにも。中こころ
げくしに。今りじめて長とおぼしべきひとしたる。
うるげなれば。えしぬ山路にもえしなすまじうなんと

うちしげりて出なんとするに、尼君なごりおしく
おぼしめしてしづかにて、御ざり出させ給へ。
あまりにちか〳〵しきもうたて侍れば、さいはひ
すきもてうつりすゞなるしんもさすがあり
びんちよしうそ胸のかはきもしばしのめと侍りし
だゞりまぶれぐなる心ちぞさめ〳〵と出川をかり。
わかりもてきなれなくかげなかりけるひもぞさそ
のはあらず。まさしじとせんぞうくりなんと
すゞと。笛の音さへあらずいとゞおぼえて
かゝる秋の月をあかれとるぬ人や山のも
ちる君はとまりぬべきなんぞとまつもさせらく

なんさて（浮ノ）語といふ心（中ね）とさめさして
山（中ね）のもとはいつまで月をなぶめえんねやの
いさまもしるしありやとなどいふ。これ大尼君。
笛（かえ）の口を目のるまさつけたりかれば。さすがり
めでくしきたり。そくしこ打しもぶさおさましさ
いなくさぶ忍まで。ちかくむかしのことなども
かけていたずこれともしるぬなるべし。いで（大尼詞）その
琴（きん）のことひきぬへ。よて笛（ぶえ）は月はいとおかしき
物ぞかし。いづくぞそ（女童ノ名）こち。琴（きん）とりてまいれと
いふ。それ（中ねん）なありとしいりまさけど。いかなる一物は
うるひといでこまりねたんさざめなき世ぞ（大尼八千あまり中将ノ事ツヽ記ニ云）

これはつけて表なるげんじそへせむとおもしく
ゆゑにぞ（中将詞）つらければとの給ふむすめ成あまぎみこれも
うきこれどのすさ物まで（左衛門詞）世をそむきつりも。このか
く覚し給ふは山風そのみこそあれ給はけっこうく
まかとて。いそぎや是は心ひざうにありて給ふんと
いひあうずもじ（琴を）ひく（中将ん）いまやうはおきくあべての人の
いふはこれまずありも物なれば。中こめづらし
くおそれはこゝも。松風もいとよくきこゆ。
あさおもきとうふえの音にめでてすゞろ
ゆうりされば（大尼公）いづよくめでられてねまどひもとす
おきておくり（詞）さうなかむかしは何づまごとなどこそは

ともなくひさ侍しかど今の世まはかりまゝる
まやあんず子の僧都のさゝまゝし念佛(ねんぶつ)より外(ほか)の
あぐつぎなをそとゝしさなめられしかば何かは
とてひさ侍ぬなりさるはいとよくなることも侍り
といひつゞけていとひか面目しと思ふれば(伴ね)いと
悪びやかまうちつゝひて(詞)いとあやしきこと給
せいし罪を給けり僧都かれ極(ごくらく)示といふなり所には
がさうなどもこれかゝることなして天人なれども
まひあそぶこそこうとうなれどこなひまぎれ罪(つみ)
うべきことかはと思ふて侍らずやとしかをば(大尼ん)い
とかしとして(詞)いでとれもりけんそ(童ノ名也)あづまさりてと

いかまも志もぶさはこゝろず。人ぐはこゝろしとおも
へど。そうげなさへ。うゝめしげまうれへていひ
きうすれば。いと聞しくてまうせこり。大尼とりよをて。
こゝいまれ笛の音をも聞ゆず。こゝをのがこゝろを
やりて。おづまれ志しべを。けまさもやうましふ。
これことも。れ志ゝ忌やめつゝを。これをのこめで
こゝろとして。こけあち。ぱりくこりこれなどうさ
くへし。ちやりうまひきこゝろこと紫ども。つりなく
かゝめきこゝり。いと聞しうい夜の世まこゝろしぬ
ことだこそかひさ給れと思ひれば。大尼ゐ〻ほのぐ
しくゝこゝろあるひとまさひこゝて。詞いまやうの

けるさひとはかやうのことをぞこれまれざりける。
実は月ごろもれし給める姫君(浮)。うらうらけうらは
もれし給めれど。もちろうるあぐけざなどし
給ひず。じもれてなんものし給めると。(まれ)紙がしこる
うちあざけるひてうるを。ゆま君などはかるから
いうしとおぼせ。これまことこれさめて。(中ね)かへり給
程も。山おろし吹て。罪しくるふえの音。いとおもしう
まして。おきあしうる。(中ね)つとめて。(文句)よべはかるぐ心
ぞれ侍しかば。いそぎまうで侍し
(中ね)けしこれぬせうしのことも。(完ふけ)苗行のつるきふし
まもねぞなれける。なほ紙せうし。見しきるがり

としへなさせぬへ思ぐれぬべくハしきぐしき
までもなまかかとあるをいとぐしびたるハなりこぶ
とぐめぐるげなる気色にてかさのふ
尾志
笛の音に芳のことも思がれてくるし程も
袖ぞぬれまし おやしう 拙しきぬまやとまでこ
ゆるありさ海ハおいびとれとりず 語にさうしめし
けんしとあり めづらしかしぬもこ前なきこうち
して うちとられけんし 萩のたまをとらぬ 程に
ととづれつるいとしろしうもあるかれ人の
こころハあれがちなる拙なりかりとこしりしおり
なりもやうくさまるまくに 程なるすぢのこ

ひとまもせひきれたすべきき海ま。とく（尼二）なしぬてよ
とて。鹽ならひてよこぬふ。こころの間まもねんじ
ぬへりぐ（尼宗心 ほくす）よろづまつけて。世中をせひそつれだ。
つき人とてありしやうなることもことまなく。むす
ぼれたる中ぞなりとせふ。かくうちのうるかひを
うけくしさまよろづのさがミゆりして。あけられの
月ぬまたうり。むうしけつひ給ありハ。ぞづくしく
めでこきもれませへり。九月まなりて。この頃まだ君
ちけまはまうげ。年どろいと心ぼそきこまぬしき
人のうへもせやまれざりしを。かくあらぬ人とも
おぼし給りぬなぐさめをえられバ。親（くんとん）者のれたりし

うれしとて。ぐりやぐちてまうで給ありかり。いざ尾宮河
ゆへ人やはしらんとする。おなじ仏なれど。さやうま
所まをこなひこうなん。しるしあてゝ。ゆきこあしお
同かとそぐのしこうれど。芳(ほん)かゝぐ君。めれとなど
かやうまいひしらせつゝ。ふびくまうでさしな。
かひなきまこそあめれ。余さへ心まかなかず。ふぐひ
なきいうじきめをこうはといと心うきうちまも。
しらぬ人まくしてさうこちのありきをしらんん
よと。そらおそろしく。若田。心ごもきさ海まは
いひもなきて。心ちのいとあしうのこ侍れば。さやう
なんこちの程まも。いかゞなどつくましうなんと

の語。尾志ん もれをぢはさもしめべき人ぞうしとして。
しぬてもいざれ[illegible]
浮 ちれくてよるかる川のうきをまはづ○も
ゆりじ二もとの杉（すぎ）とまるひまもしりうるを。尾
志こうけて。二本（尾志詞）はまるもあひ男くんとしふ人
あるべしとこそふれごとをいひあてうるに。浮 ひ○
つぶれて。ぬれてあるめめるも。いとあいぎやう
つきうりくしげあり
尾志 かる川の杉のもとぶちしる○どもすぎすし
ひとまよそへてぞうるこしあるこしあるきいへを
くちさくいふ。志（去答へ）のびてといへどこれ人しるひつ。

そくまは人ずくなまそ（ほノ）かハきんを心ぐるしがりて
心ぐをあるかねのあま（女ぐうこ）左衛つとてあるかとれしき
ひと。けらハぐりぞとぐめたりけるこれいでこち
けるをなが（ほう）めいでく。おさまし（ほん）こさことをたもひ
ながらも。今もいらぐきんとこれもしべまおもふ人（白ろう）
ひとりもれし給ちぬハ心ぼそくもあるかれと。
いとつれぐなるま。中ねのれふこあるま。れくんぜ（かね尼詞）
よといへど。さ（ほ）くもいれ給ちず。いとぐひともこえず。
つれぐとこしうるもしさ記をしくし給。くるしき（かね尼詞）
まぐもながめさせもなふかれ。れ碁（ご）うたをなへといふ。
いと（ほう詞）あやしうこそハありしうとハのたまへど

うたんとおぼしたれば（かわ尼）ぢんとりまやまて我いと
せて（浮ニ）ぢんをさせたてまつりたるまいとしよあるれば
（かわ尼まけてまををとすと）まくてあるをしてうつ（かわ尼詞）おまうへとうゐるしを給ひ
なん。これ此碁（ご）こをたてまつらん。此此碁（ご）ぞいと
ひよりし。僧都のさきをやうよりいうじうこの
まをぬて。けしうはなしずと思しうりしといと。
きせいぢとうまるなりてさし出てこそうたざしめ。
此ごまはまそじりしとみえぬしまつゐる僧都
なんかたつまけさせ給しさせいが碁（ご）りまさら
をぬべきなめり。おれいうじとけうずれば（浮ム）さざすざ
うつあまびさいのうつぬる。西ごのうするに。むけ

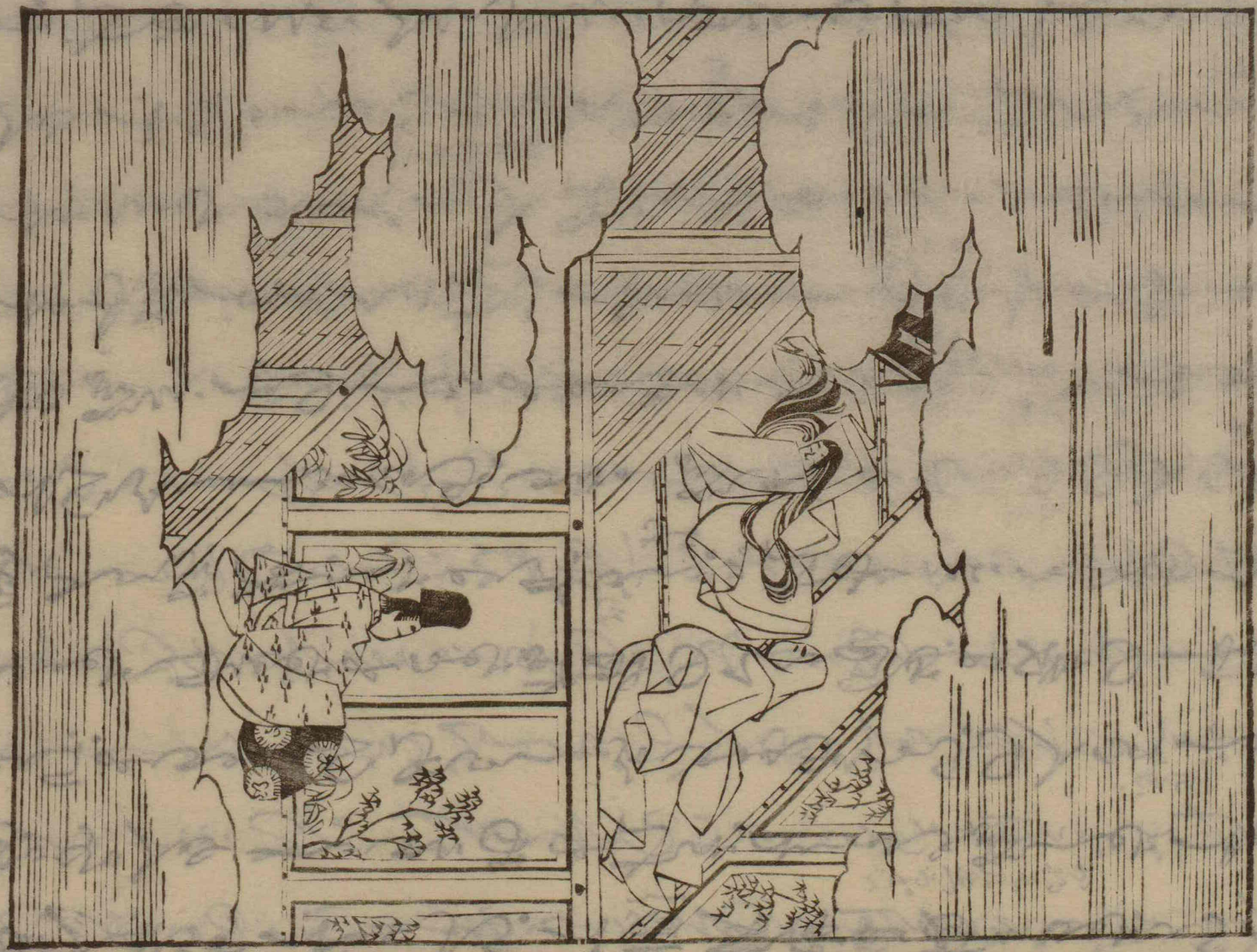
うしきことも志そめてげかれとせてぞちあし
とてかしぬぬ時ぞ（かね尼詞）ちれぐ志うもてなしておりし
まをおくられ物を。いうじう志づこもてなさせ給
こそくちあしく。むまさずあらん心ちし給れと
ふ。夕ぐれの風のをとともあられなるに。也（ほん）いげる
ことあはくて
心（ほ）は秋の夕をもとしるゞ。どもなぐ無る袖に
霧ぞこぼるゝ。月さしいでゝありしき程に。ひる
文ありつる中ねおりしたり。あれ（ほ）うそこは何ぞと
おぼしめへぐ。おくふくいり給を。さ（かね尼詞）もあまりにも
おりしますれかれ。れうろざし此ほども。衰まさる

ありまそ侍めれ。ほのかもきこえて給いむことも
こうをぬへ志こうりんことのやうにおぼしこな
こそなどいふ。いと（浮ん）りしさなくおぼゆ。おは（かわ尼詞）をあ
よしをひへど。ひるのつゝひの一（浮ノ）所ますど。とひさ
こうべし。いと（中将）ことおほくうしこそ。此（詞）こ思もきく
侍らじ。ゐぬぐけだくてきこえんこと紙。さくまく
しとも。おぼしことなれど。よろづにいひまぎて。
いと心うく。所をつけてこそもれて表もまされ。何ま
里かうたまずあぐ先に

山里（中将）のあさぼ表ふるさあれをも拙思
人はなりひこそ志れ。をのづられ心をよひぬべき

をしまどおれぞ。おまごみあはをでまぞらり
きゝゆべき人もまべしぞいとよげゐやうなら
ひとせひれぞ
（浮）うきゝ物とせひもしらですぐせ力を拙思
人とゐとはしりけるを

（お物尾伝）



わざとにもあらぬを、こころへこころゆれど
いざおやれとて、おまへさまいさゝかいでめへ
ところこしうごくもとごれ人へござりますまで
うきみをふ。おやしきさまでつれまゐらせ給ひやうそ。
りてられば。御ひかりそゐるも、さうしのぞき給ひ
おい人のれろまいり給ひけり。おきましうちひて
くあんとききあれば。かりうへのすがた給へらん心
の中の哀れは。おほゆるの有様なともあまさけあるう
まじさくへの。いとあまりおしらぬひとよりもげに
もてなし給ゆつしそ。それも拙こうし、ゆく人かな
とかなうき身に世縁恨て、いつまでおめすべき

人ぞなど。ゐさ海とひて。ことゆしげるのこゑばい
されど。こ海（お持尼尼来ちなどハ）なることといひぞ。はいひきうをん。
（汨）こゞ（尼玄ノ）出り里もゐべさ人のとしれいうとくしき
やうまてゐし給しをもいきまうであひゆて。
こゞ田里もゐるとぞいし（浮）娘ぞいいとむつしと
のこゑくおい（大尼）べのあらりまういづ姫していも
ねれず。よひ（大尼）まどひもえもいもず。おどろくしき
いびきしつ。まへまもおすすひころあまぞふくり
ふして。をとらじといびきあもをこり。いと（浮ハ）おそろし
うこゑひこれ人ぞまやくられなんとも。おしりゐ
身なれど。例のうろこはさはひとろ（ぞ）橋あやうがりて

ゑりきこりけんもれてやうよきびしくおぼゆ。
こもきとも（女ノ童ノ名之）ものおもてかりしつれど色めきて此めづら
しき男の。えんぶちねこりくるりいる事也。
いまやくらくとまちねぬへれど。いとしたるき
これもしべなりや。中ねいひつづくひてくりる
それがいと（お袋尼たまつなど詞）なきけなくむもれてもおりしますか。
あこうれくちをちど。そしりてこれ一所にねぬ。
夜中ばかりまやなりぬんとしふほどに。（大尼）何まぞ
しいぶきおぼれておきよくり。ほかげなりしら
つきはいとしろきに。くろきもれをづきて。これ
（浮）君のふしまへるあやしがりて。いとちとういふなる

もれがさるいぎすぶ。ぶさいまてをあてゝ。おやし（大尼詞）
これはこそとしてねげなるゝ思まてこをこせたる。
さしるゝこゞいまゝひてんとするぞとおぼゆる。鬼（とま）乃
とりもてこけん程は。抱おぼくざりそれが。中々心やす
しいかさ風まをんとおぼゆるむけりしさまを。
いこゞこさき風まていきゝへり人まなりて。又ありし
色々のうきこと紙ぶこゞこれむつりしともおそろし
とも。もれをおもふよ。しれましけば。これよりを
おそろしげなるもれく中よとそはあしましとも
やゝるむかしよりのこと紙。まどろまれぬまゝなり。
君よりもしつゞくるまゝ。いと心うく。おや（ハノ子）さこそらえん

人のれこちもそこまつらずもろう成(ちう)おづまを
くるぐ年月とゆきて、ふ夜さりしらづね
よりて、うれしれもしとむきこしし、中いらの
れあらりもむまずまて、ふじすぎさりかくりむ
さぐめ給しひ(苦)とまつけて、やうしくこのうさをも
なぐさめいべきれなおさましうまてそこなひ
ろもをむまてゆけば、家(句)をすうしも衣とむひ男
けん心ぞいとかしかくぬ、ふじこの人(句)のれゆりま
さすらへぬうぞとゆもへばうじまれ女とゑしま
ちぶり給しとおどてかりしとむ男をんとこゑ
なくあきまろ心ちすいじめりりすき(苦ノ事)おからも

のどやかな掴し給しひとは、此なり坂(れ)なりなど。
ふいづるぞこよなりけり。かくてこそありかれと。
恵(恵)こつけられてまつらんたづしさは、ひとより
まさりぬべし。さすがにこの世にはまし此さ由を。
よそながらざるいつるはえんとするとうちふれ
けろの心や。かくざるさもじなどこころひとろを人
さふからうしそて馬のなくをさそて、いとうれし。
母の此心をきくらんはましていかるらんとも
何して。こちもいとあし。(こもきつるえ)とも(ま)そ(ま)てけるべき
人もとこるこの。はなをかしぬるに。いびこれ人(老人)は
いとしくおきて。かゆなどむつしきことぐ申候

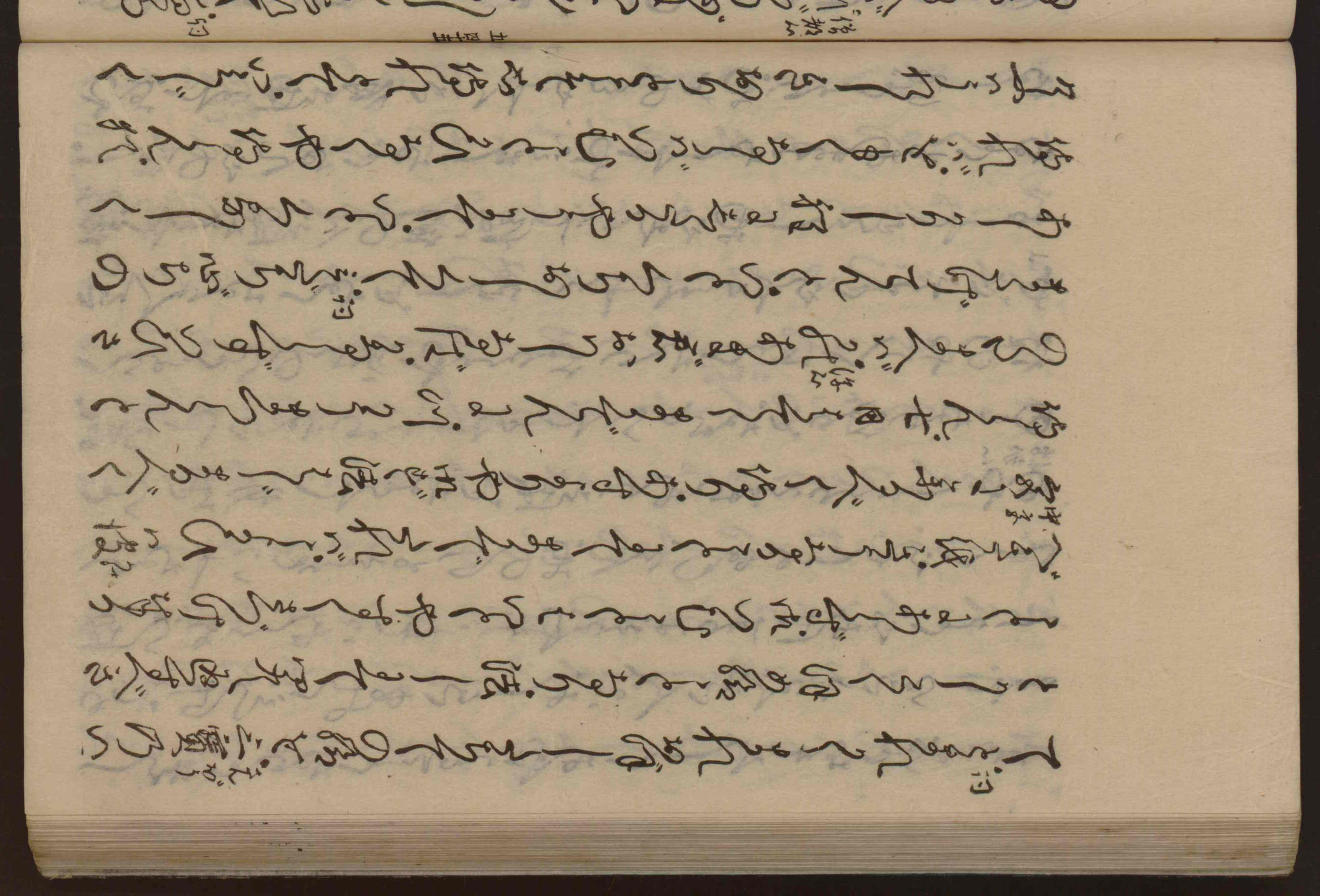
もてたやして。おまへまさくまさくしめきなどより
（老人詞）
さていへど。まりなるひもいと心づきなくうさてこ
（浮人）
しらぬ心ちしてなやましくなどとなしひ女を。
（老人）
しゐていふもいとこちなし。げすぐしき法師
どしなどあまたさて。僧都はふかりさせ給べし。
（大尼ノ人詞）
などおちくまいとさふなれば。一品宮（法師詞女一）のれもれくける
なやまを給けり。山の座（ざす）これぞ法つゝまつらを海
へどなをそうげまつらを給いでハしるしなしとて。
こさのふ二さびなんめし給し。左大臣殿（タ）の四位かね。
よべ東ふけてなんのぼりなりしまして。后（きさい）の宮（中宮）乃
れうこなど給ひれば。かりさせ給なりなどいとこな

やうにいひなす。たづしくともおひてあまになし
なてよといはん。さしらべきくなくて。よきあり
まこそとせんべ。おさそ心ちのいとあしうのミ侍るを。
僧都のありさをなんこんにいむことうけ侍らんと
なんせ侍るを。さやうにまゐてなんとうたひなんぞ。
ばけくしうおうれづくれいのうにおりして。
うこいあまぎのミかづり給を。ことひとにてゐれ
さきんもうこそおぼゆるに。えきぬ
ことなれば。こぐすうしときくぐして。おやにいま
一こびうちがうのさ雨をこしぎなりなんこそ。人
やはなしぎいとうなしかれ。いこうつづひし

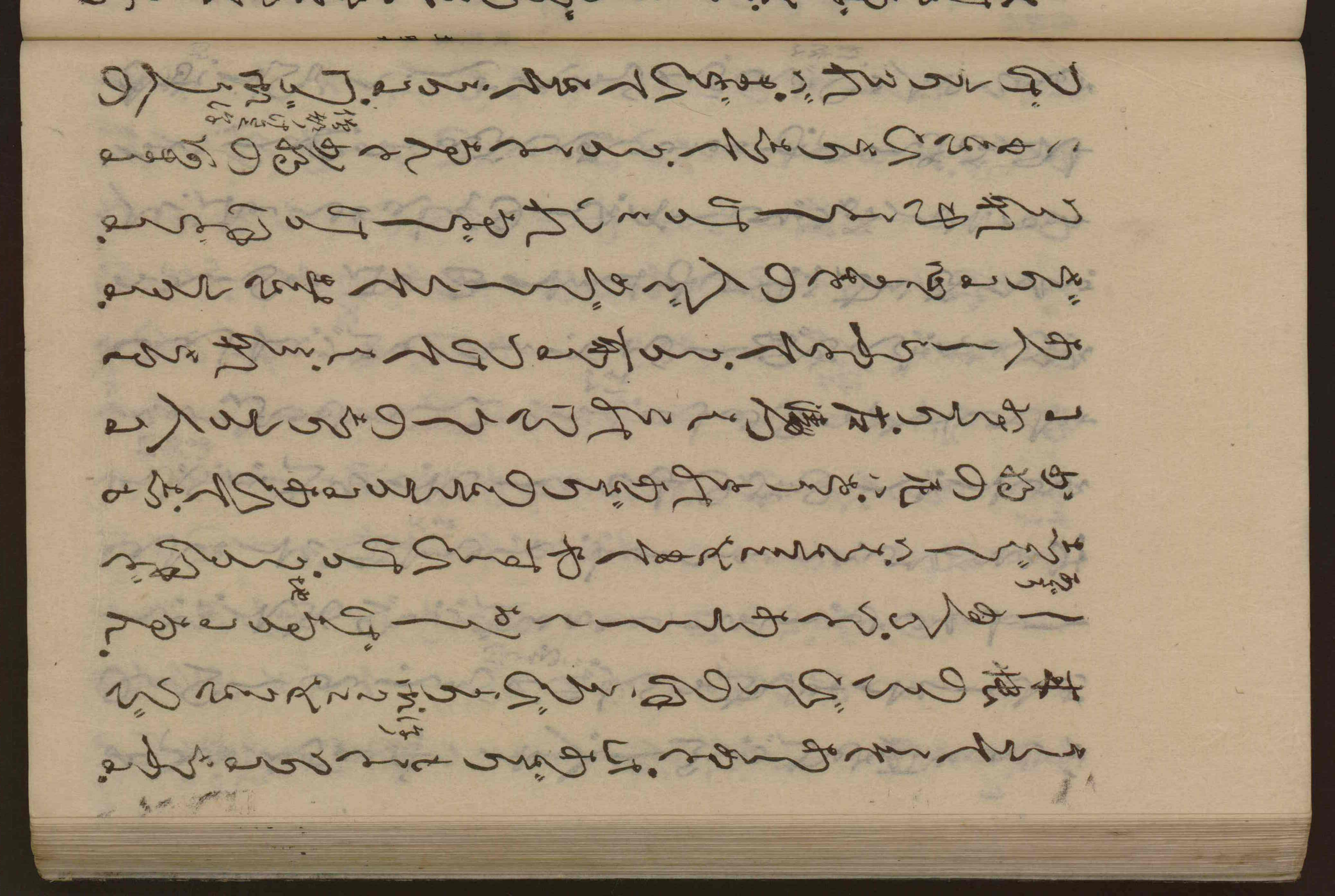
こそ申しまゐて、いむことうけこそまつらんと
の給つるとかゝる。ぶち（僧都）てこゝるにいまして、そ
まやおもしますとて、本性のもとにつゐるゐんべ。
つまし（浮心）それどねざりよりて、いゝ人も給ふ（僧都詞）いまて
こゝまりそめてしもさるべきむしのちぎりあり
けるにこそとゝゐへて、ゆいのりなどゐんごろに
けりまつりしを法しへそのことゝなくて、ゆ
ゐこゝろくうけ給たんもびんなれば、ぜゐんに
なんとろかるやうにあり給ぬるいとあやもしき
さ夜に世をそむきゐる人のゆあるりに、いつぞ
おりしますんとの給世（浮付）中に給しことゝもち

侍し身の。いとあやしくて今まで侍りを。こゝろ
うしゝ心侍り抱かしよろづにまれきせ給けりれ
こゝろぐ人をなん。いふかひなきこゝちにも。心こまへ
ましらくをれよげ今ぞのゝ。つゐにえとまりまじく
心こまへらくをおまるなきせまてよ。世中にり
侍りともれいの人にて。なぐしゝべくも侍しぬ身に
なぐこさこゝ給。まゝいとりさ紀をけなりれ行に。
いかでかひこゝちにしかはなげしこんかくりて
何にあることなり。心こゝちて心をあらし給ほどは
つよくなげきど。年月にれば。女の此身といふ此。
いとこゝろぐしきまれになどのまへぐ。あきなく

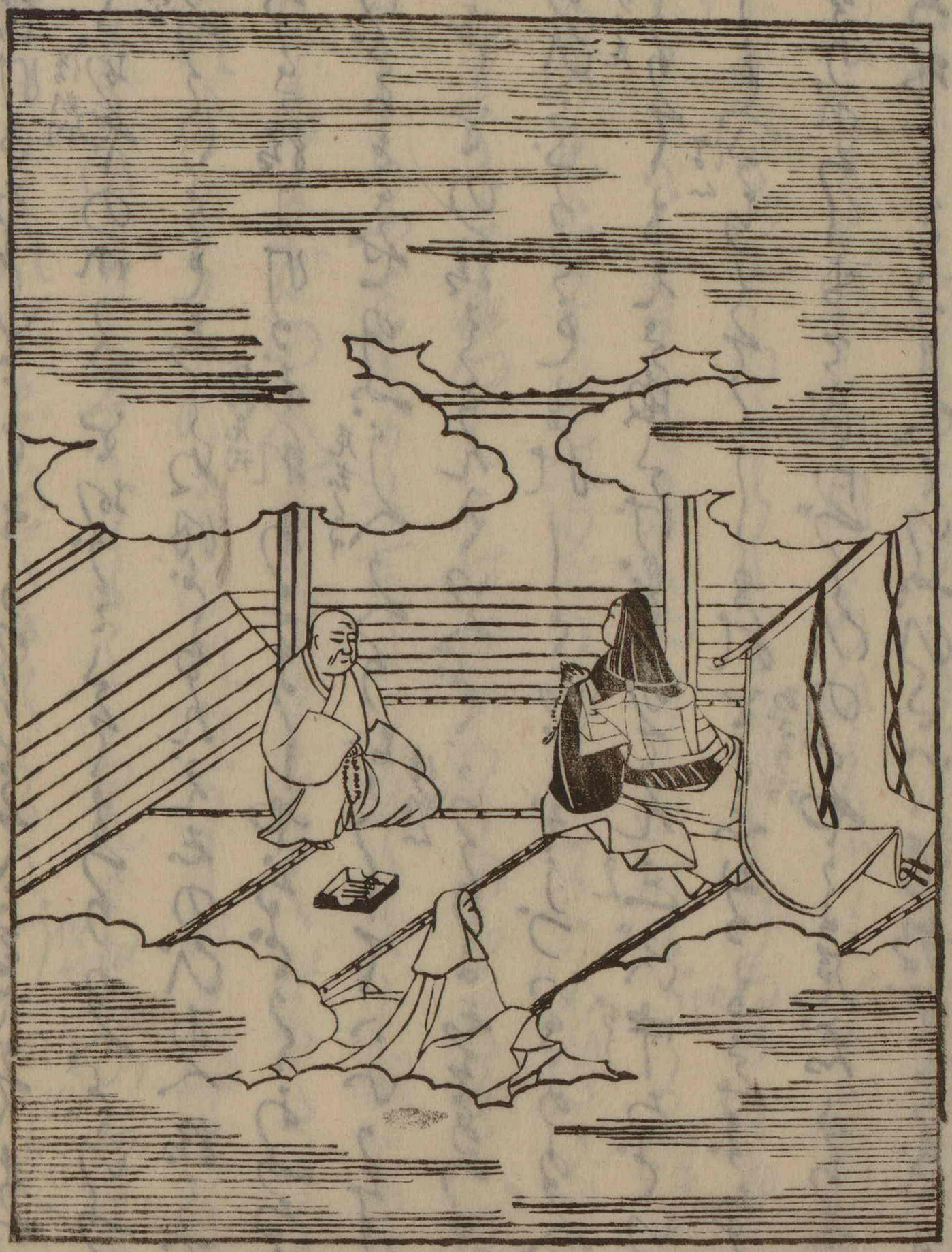
侍しほどより。地とのゝせゝめべき有さ海まで。おや
などもあまるなしてや。こましなどなん心の給し。
ましてせうし地せきりて後は。例の人ざ海なしで。後(のちれ)
世(よ)とごまとせふろふくしとなくなるべき
程のやうくちくなり侍るるや。心ちのいとよりく
のゝなり侍るとなをいてとてうちなさつの給。
あや(僧都ん)しうろうちありさ海をなどて力をいと
りしくせうじめおひれん。地のけもさしそいふなり
しうと。心あはするよ。さるやうこそいあらめ。い海
まで。いきこるべき人ハおしきもれくこつけそめ
こうよ。いとおそろしくあやうきことなりと思し



なきのへばひざり心ないとくおしくせひて[句]あや
かけ侍ぬらんやまよりかりけることむしはこと
とも笑て給はざりしをさしのをなまくまはさへ
がさく侍ればうちやすきて内まはまいらんと
ゑ侍りをさしりおぼしいそぐことなれば[浮ふ]つりう
まつりてんとのなふるいとうれしくなりぬさきに
とりてくしの君のふるさしいでこれぞいづら[俗歌句]
だとこたちくことよぶさじめこうけこそまつり[浮と]
しふたりなぐらともよまをればよびいれてれぐく
おろしこそまつれといふげよいとじうりしひとの
れありさ夜なればうれしべきそハ世よおもしもんも



衣けさちどとごとさしげりとてさをこそまふり
て。おや（僧類詞）のれうこをおぼえこそまつりあへといふ
いづ（淳ん）くともしらぬほどなん。えしのびあへ給ひで
なさ給ひけり。おれ（お物尾詞）あさましやらどうくあふなさ
けざんをさせぬふ。うへ（尾志ノ事）うへりおもしていいかすり
ことをの給ひきんといへど。うづ（僧類ん）りはしそめつるを。
いひこぶるともしもしとしてそうづいきめのへだ
よりて（お物尾）もえさ夜こげど。なてん三（さん）がい中（ぢう）などいふ
まもこちてくしもれをとしさるもさすがなり
なり。れぐしもそぎけづしひのどや（あざり詞）かは尾だこちして
なをさをこまへといふ。ひこいは僧類ぜそぎのふ



僧都詞

うろはかたちやつしぬて。かひこまふなどと。こう
とさことごもとさくをぬふ。ほん とみるをさすべくを
あらず。これいひしをこまへることとこれしくを
志けるかれと。是のこそいけるほとけハしるしあて
見て給ふ。これ人ごむしげまりぬ。よろの風の君に。
これ人ご心ぼそこさはしまねも。しばしのことぞ
いほいとめでこくなりぬひなんと。これこ男こつる
此男をかくしれさをぬて。のくりおほうな此世乃
しるをいつるをさせ給へんとするぞ。おいおとろへ
こう人ごよ。いまはかぎりとしひてこれて。いと
うるしこれぞ。ほん をこゝ今ハ

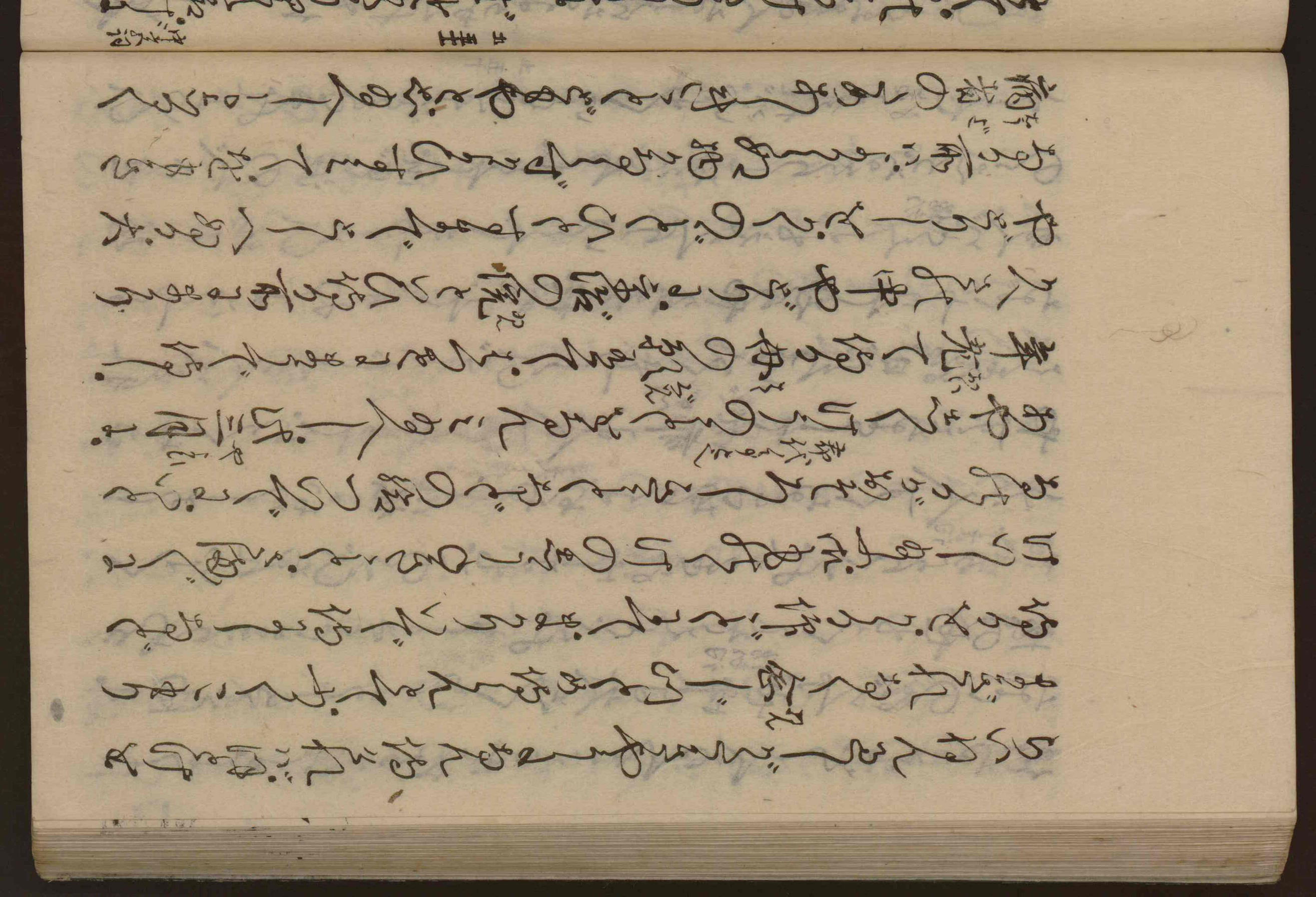
心やすくうれし。世ましへき物とは思はけどなり
ぬるこそはいとめでたきことなれと。むすめのあき
たる心ちぞ志給けるけとめてはさすがに人のゆる
さぬことなれば。かたりこんさ後こえんといと
たづしく。かみのすそのほはりまほどれたる
やうは志どけなくさへそがれたるをむつしき
ことをいとで。いくろりん人もがれとさまごとる
つけてもつましくてくらうしなしておもも。
ちふこと紙人はいひつぐけんことのくし。もとより
ざまもうぐしうしぬ力をまいてなつしく
しくるべき人さへなれば。ただ呪(すぢ)はむかひてむ

じやひちるしありけりされどもあへなきわざ
なれば。とかくしえしりての後をとぶらはゞこそ
まことひと様もなくひしがゞさるべくしんありけれは
とりひしまれど。いとくちおしくそ。立てり
こゝえんちちなきれ
こゝしとやくこぞきるまきんあま舟にのり
きれど。いとそがくれ御なすがりて旅のもの
哀なるおりに。今はとおもふも哀なる拙かしいぐ
嘆ざなん。いとさるさまもみそしに
うきそうきせのよしをとるれども染
もちしめおまゐらゝまとど。御のであひに志のへるを。

つゝそなり。かさう(浮詞)にしてごるこそとのたまへど。
中(かね尼詞)くりさそこちひ侍りなんとてやまり。先づ(中ねん)
しきまもいふるなく。なるしくなんおぼしけり。
抱まうでのひ(尼君)とくりまて。むさもぐ給とかぐり
なし。かう(詞)勇まてかすく先こゝろんこそ。
ひなし侍れど。のたりおほかる所方をいでへ
給ひむとすらん。をのれも世る侍らんこと。けふ
あすともしりがたきに。いでうしろやすくしをき
こそまうらんと。よろづにしぬへてこそ。仏にも祈(いの)
果しつれと。ふしまろびつゝ。いとゞいとゞげるし給
へるにも。雨(浮ん)とのあやのやがてうちもちきぬと。む

まどひ給けんほど。としもうぞ。まけいとうし
うり多。れいのいへもまでそむきぬぬへるさ海。
いとつくうけくしげなれば。いと尾末詞もれもうるくぞ
おりしけり。つゝさ此心なれど。なくくれず此
ことなといそぎ給。まびあいてなれましことなれば。
こうちさけさなどしたり。あるへぐもかゝる色を
めひこきそまつるまつけても。いと人々詞おぼくぞうれ
しき山里のひかりと明くれこそまつりつゝ拙を。
くちおしさつぎかれとおもしがりけく。僧都を
うしこそしりかり。一女一和宮のれなやこげに皮(かれ)ぢしの
いひしもしるく。いちぢるさことぞもありてなそ

こゝせ給はれば。いよくいとこうとさまれはいひ
のこゝろ。なぞりもおそろしとて。此ぞ法のべさせ
ゐへば。（傍教）とみまもえかへりいしぞさふらひ給ひ。毎
なぞかりて。しめやかなる夜めして。よゐまさふら
こゝを給。日ごろいくさふらひごうじこゝろ人は。これ
やすこなどして此（ごぜん）前は人ずくなまて。ちくおさ
こゝろ人すくなさありは。（中文と傍教と）おなし此様はかりしまし
て。（中文訂）芳よりこれ（キヽを給）中はもこのこびなんいよく
後の世もうくこそこそこれもしさこそまさりぬる
などの給ひ寸。（傍教訂）世中は久しく侍るまじきさ海は。
佛などもをしへゐることぞ侍るうちは。こゝとし



らいねんゐしがたきやうなるん侍れば、ほとけを
まぎれなく念じ(れん)めとめ侍らんとて、ふくこまり
侍るをかうる仰ごとまてまかりいで侍ましなど
けいしなふ此もれくけのまうしきこと、さ海ぐに
なれるがおそろしきことなどの給ついでにいと
あやまたくけうのことなるんこゝ人へし、此三月(やよい)に
年老(おい)て侍る母(ぞ)の親(ぞん)をてもつきにまうで侍し。
久され中やどりに、宇治の院(ゐん)といひ侍る所にまかり
やどりしをかくのごとひとすまでとしへぬる。大
なる所にようしぬ地なるしずかひすゑてをもき
病者(たうざ)のこゝあしきことどもやとぶ人へしゝ上いるく

とそ。されはけなしことげをくり男給げは中ノ詞
いとめづらかなることかなとて。ちくさう婦人で
これよりいりかたを。おそろしく思されて。おどろき
さも給。荵おねのうしひ給宰(さい)相(しやう)のこゝろも。これ
ことゝもなり。おどろくさを給人でもしおすまとも
ならず。ぞうげとぢきもんへるれしこゝをところも
なきことゝけりて。ざりとせひて。くちしくもその
但どもことをば。いひさしけ。む万人(まにん)これゑびまなき
出給つらくつまりる。小こ侍るあまどもおひとひ
侍んとて。まうりょうかりける。あく世家(け)乃
こゝろざしかくきよし。○んごろまくらつひ給し

かばかしらおろし侍りまきおまるがしがいもうと。
故(こ)清(しん)のこのめる侍し。尼(あま)なんうをまし。女(そんな)ごの
かたりまと。ぜよろこび侍りて。どいぶんにいたり
りづき侍けるを。かくなりまゝれば。うしゝ侍なり。
げまぞかたちは。いとうるはしくけうらまて。そこ
なひやつれんもいとおしげまなん侍し。なまびと
まゝ侍りけんと。抱よくいふ僧都まて。かたりつゞけ
ゝめへば。いかで(小宰相詞)さる所まよき人をしもとりまて
いきけん。さりとも今はしられぬらんなど此宰相乃
まんぞとふ。しらず(信教詞)さもやかたひ侍らん。まことる
やむごとなき人なるがなまゝかれも侍らしとや。

ゐ中ぐのむもめも。さるさ海しさるこそハ侍らめ。
まうの中より。佛むまれ給ひずいこそ侍らめ。さて人
まていつこかろきさ海の人ゐるん侍りけるなど
きこゝ給。そのこゝろかれけるりこのさしうをるけん
ひとをおぼしいづ。この所まへなる人もおほごさこの
つゝへゝ。おやしくてうをゝる人とはさくをさ
されば。それまやあらんとハせひかれど。さぐめなさ
ことなり。僧数もかゝる人世るあるもれともしられ
じと。よくもあらぬかゝきぐちゝる人もあるやうに
おもむけて。かくしまびゐるをゞとのさ海のおや
しかれば。けいし侍るなりと。な海がくすかしき

あはれびとはもろこしならずや。（中女詞）いそれはみことぞおれ。
大（薫）ねまふろきびやし。この人（寧お）までの後すれども。いづ
くるまもうゝすべきことをさだめて。さるんとも
しらずあなづらしげある人はうち出の後よし
きんもつまつくおぼしてやこるかり。（女一）旅家とて
さりもそさとみて。そうげものがりぬ。（小聖）こまらり
かへれば。（尼公）いうじくうしうておもくかうれ有様
まそつきあぬべきことを。のみひもおいをずあり
まけうことなるん。ひとおやちきなどのみへどうひ
あし。（僧都詞）うへいうづれなこあひそしぬへ。老ふるりつき
さびしめあさき世ありけり。つあさ柚よおぼしそりふるも。

ことなりなる此事をやとの給はもいとゝ(ほん)もづらしく
なんおぼしける此国(僧都詞)うづくおこしくしのへとて。
あやうす和きぬなどいふ和なりとき給なるがし
が侍らんかぎりはつゝうまつりなんなるゝおぼし
けづらふべきつゐなき世におひ出て。をはんの栄花(えいぐハ)
にねがひまいはなくりざりなん。所をくすてがたく。
我もひともおぼしべかめることなめるゝ。かゝる林(しや)ん
中にをこなひつとめ給はん力はいかゞすゝいうしめ
たくもはづしくもおぼすべきこれおろん命を。
葉のうすさがごとしといひ志しをて。松門(せうもん)に暁(あかつき)いる
つとて月徘徊(こいくハい)すと。法師なれどいとよしく志う。

そづしげなるさ風まての給ことぞと。しやうまも
いひさうを給かれとさくねたり。はふいひ〇もする
かく風のをともいと心ぼそこゑ。おりしろ人も。衣
山ぶしいかる風まぞねたなるなかしと
いふをさて。我も今は山ぶしぞかしことたりな
とまゝぬ泪なりかりとしけくたしのるまたり
いぞくこれがたるかなる行だよりかりぞぬすぐる
色こまたちまぢりて。山へのぼる人なりとても。
こなるの風まはなふひともいと。むさうなり。ふろ
笞とりいふかるよりありく法しの何とのこまれ
まれいこゆるを。例のさぐるこつけたるいあいなく

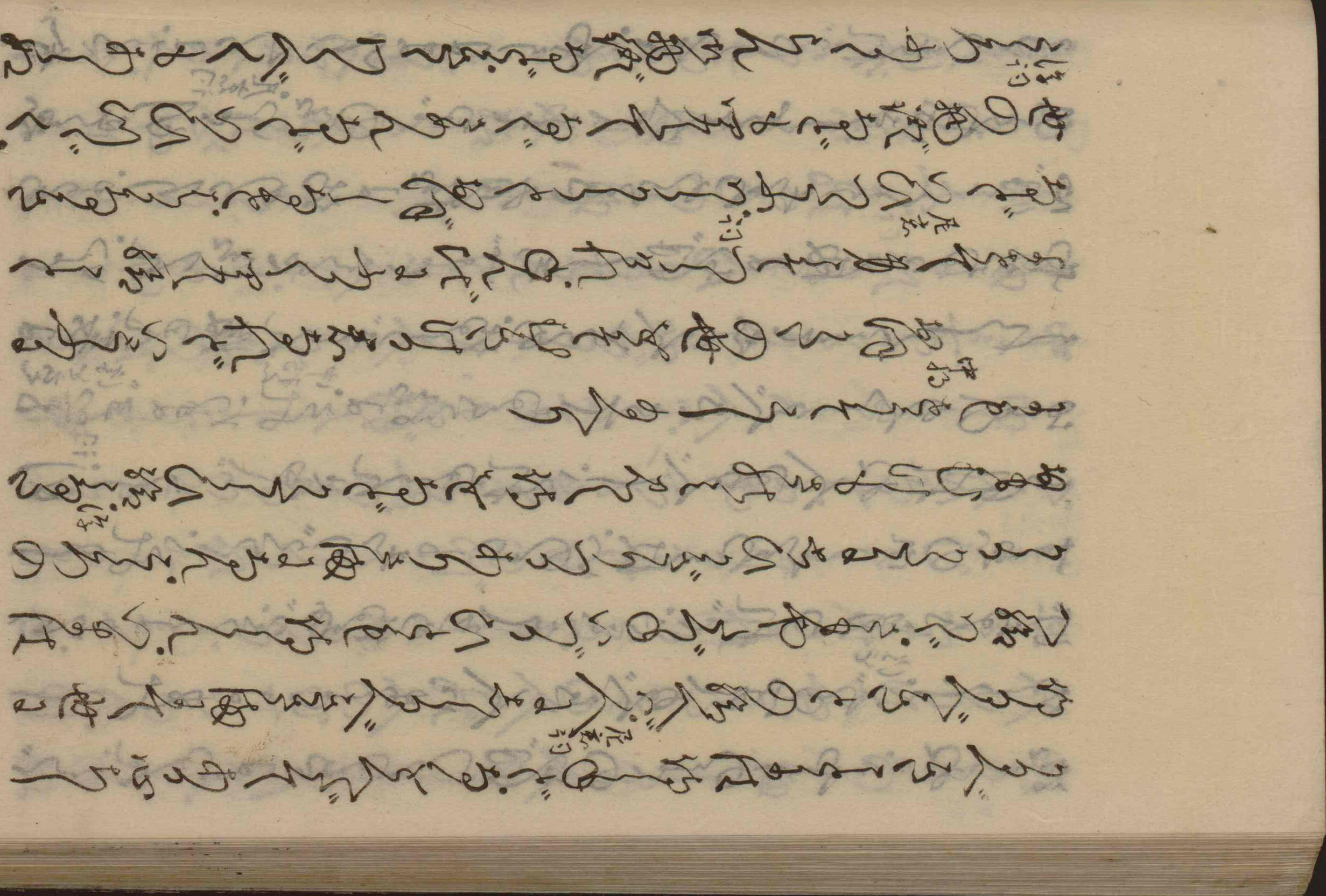
かづしきまゝ。これ根(そこ)はびし中将なりかり。かひ(中将ハ)
なきことをいたんとてもちしかりけるを。紅葉(もみぢ)乃
いとおもしろく。かの(かう)のくれなゐる深(そめ)おしこう色々
なれば。へろりよりぞ抱衣なりけるこゝまいと心ち
よげなる人をこうけこゝろばおやしくぞ思ゆべき
などせて。いと(詞)夜ありてつれぐなる心ちしたるに。
紅葉もいつまとしなてなん。れ立入り接(さだ)○もしけ
べきまのもとにこそとて。こ出しゆへり。このまゝ君
れいのなるゝゆろまて
尾志(こ)
来(こ)がしのゆきまし山のふもとにはこち
ろうべきけぐまぞちまきとのゆへだ

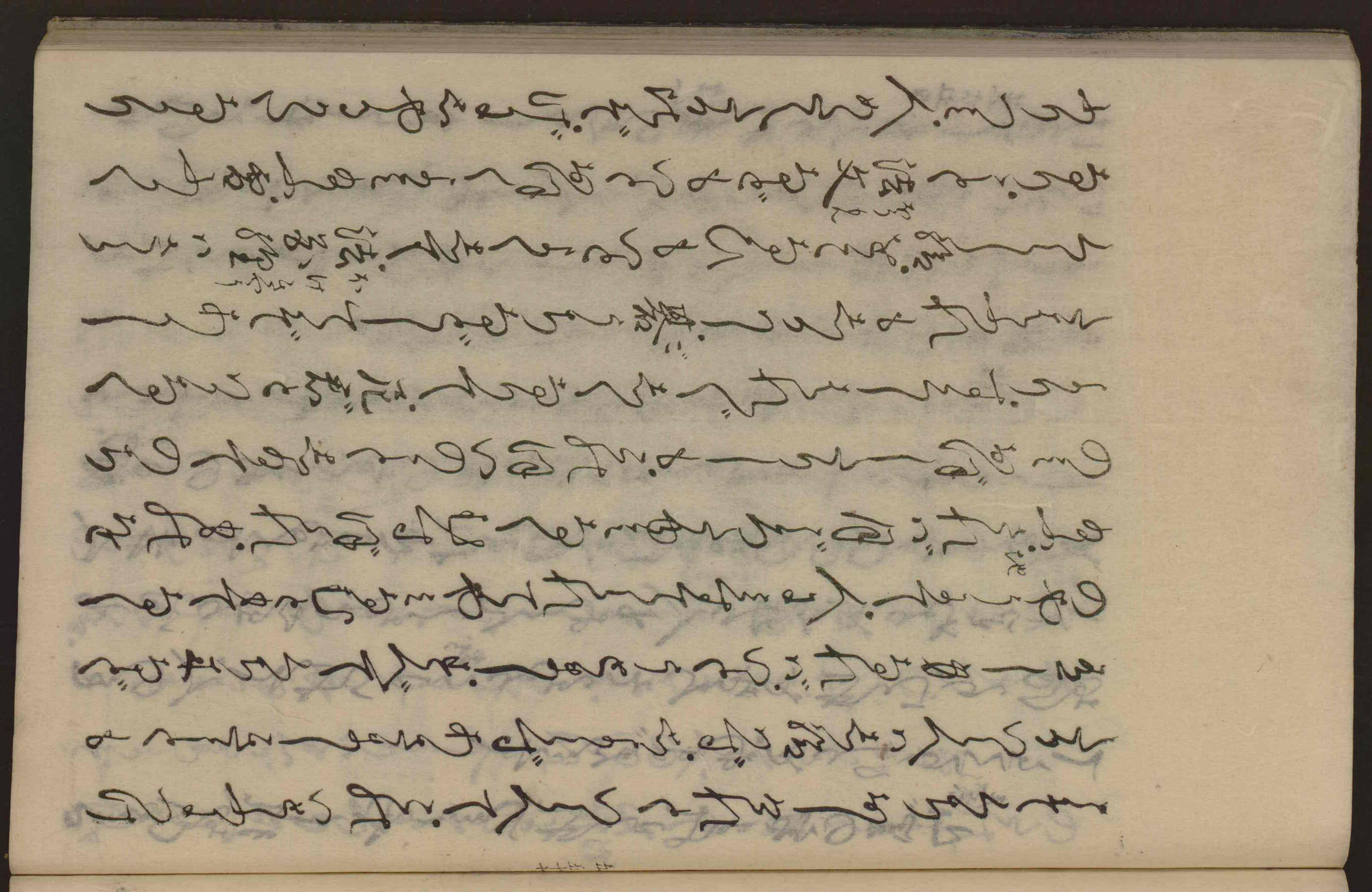
中将
まの人もあらじとちゝやまず置れとぞ思を
しりてなほぞすぎこうきいふひなきへ（浮）のれと代
なをつきをずのなて。さ海かたりぬへらんさ海を。
いさくかこをまとかわのあままの給。それをぞ
契（ちぎり）しまるしまをまとをめぬへ。いり（かわ尼）てこうる。
（浮）とさしへまもこをまほしきさ海をてぞおもす。
うすきまび色のあやなかはくもざうなどすこる
かなをきそいとさぞやかまやうぞいなしく。今めき
こうかたちまかうは女へのあふぎ代ひろげこう
やうまこちこきすゑつきなり。さ海かまうつくしき
なりやうのけさしといこじくしこんやうは

あるく匂ひたり。とてちひちどをも給もちをずぐし
ちりき木帳よりちりけて。程よろろをいれてよ
めへるさ海。忘よもりくまほしうちうろごとに洞志
とぐめぐさき心ちすると。まいて心けの給らん男は
いかにこそまつり給らんとせて。さるべきあり
まやありけん。さうじのけがのもとに。おきたる
あれとをしへて。まぎるべきまずちどこしやつとり。
中拾ひ
いとくもせんずとてをしいうじくもふさ海
ありけるへとと。けがしたらんあやまちのやうに。
おしりくやせくなしかれば。けくこともあへず。
抱ぐるしきけもひもきえぬべかれば。のきぬ

かぢりのさ夜しらるへとうしらひて、ぞ日ぬ
人ありけんや。まるこそ、その人ハ此人のむすめなん。け
思もしらずかくれまくる。もしハ抱思くじしてせ
とそむこさまけるなど。をのげりしくれたまうる
べき代など。あやしく思くさふおまなりともかる
さ夜しらん人ハうしてもなげしにたまど。中
中に前まさりて心ぐるしうるべきを。志のびさる
さ夜は抱かくひとりてんとさへじ。まめやかな
かくふ。詞よれつ日のさ夜はハなげしもぐうとも
ありけんを。かくるさ夜は妖怪にくるなん。心やすく
ゑそしいべくなん侍る。さやうにおしへ申れ。ゆへ。さし

うけまれがたくて。やうにまいりくるにまゝ今
ひとゝ心ざしとそへてとそなどの給。いと（尼宗司）もしき
心ばそくうしろめたき有様に侍めるり。まゝめ
やかなるさ夜におぼし志ずとも給へん。いと
うれしくこそ志のへとゝめ。侍しざらん後なん。衣に
なりひのへしるべきとてなき給に。これ（仲務）なりまゝ（浮と云）も
もれぬ人なるべし。これなんと心しがたし。（詞）
す思のれうしろうは。いのちもしりがたく。これもし
げなき身なれどさきてそめ侍なばさしにかゝり
侍しじ。（浮と）ぞ。ゆしめべき人にましとにもしし
給ちぬかさやうのことのおぼつるきになん。ちぐ





けるとしもへりぬ。基(浮山)のしるしもしぞこゝ浮り
いたれる所のをとをぬさへころぼそくて。君にぞ
まどふとの給し人(白)心うしとしひもてまたれど。
なほそのありなどれことはしれず
(浮)うさくらす此山のゆきをなぶめてもふりる
しことぞうふもなしきなど例のなぐさめの手習(てなれ)
をなしなひのひまはしき給はれ世になくて年人
ごとぬるをしきる人もあらんなどしきる時も
おほかりいたれをなろそなるこ(影)まいれて人のを
てきたりけるをおまぼえて
(尼忘)山里の雪まれはられつゝちやしれおひさき

のこれまるく成とて此方(浮)にこそまつり見へりなれば
雪(浮)ふるさ時べのつれも今よりは志がるあらぞ
年もつむべきとあるをさぞ見すらんと哀なるまもこゝる
ひろべき此さ夜とこそましかばとまゝめやうまれ行なり給
○(浮ぶ)やのつまをさ紅梅(こうばい)の色もかもしぬと書やまつの
とこと茶よりも是(これ)に心よをのあるはおぢ(地)ざりしに
ひのしゝよけるまや後(ご)あ(や)にあらそまつしき給ぞら
うの尾のすうしつるきがあるめし出て茶おしすれば
かとゞがましくちるにいとゞに得ひ入れば
袖(浮)かれしひとそこそ茶のこれそれと
ほふ春の明ぼの

なほあまぎみのむまぎれ紀守（きのかこ）なりけるが、此ごろ
のぼりてさたり。三十（ミそぢ）だらりまで。かたちはさまげは
ほうりたるさ夜しかるに。なまごとかたぞおとく
しなどしつる。ぼけ（大尼）ぐしさき夜なれば。ごなる（尼宗ノ方也）
りきて。いと（紀寺詞）こゝろまくまて（大尼ノ）ひがこ給はれ。あれ
まも侍るれ。のうりなきれさ夜をこそまいか
ことゝるくて。とをきほどまとし月をなし侍るよ。
なやうち抱し給ひで後は。一所をこそれかたりは
ちきそく侍つれ。此（ひたち）性の小（当時ノ常陸如ごし）のうをばをとづれ四九
のみやといふは。いまうと（紀寺ガ）なるべし。とし（尼宗詞）月まそへ
たは。つれぐまあれなることのこまさりてなん。

ちてのつぎをさせ給りんことゝ。れ寺(てら)の里(律師)しまゐん
さるべきことの給ふをてゝ。なまがしもれ女のさう
ぞくひとぞろりてうしじ給るべきをゝ。をさせ給てん
やゝとしすべき物にいそぎをさせ給りなんといふを
きくまゝ。いつ(浮ん)でか衣ならざらん。人やあやしとゝんと
つましうて。おくまむかひてゐのへりおまぞ君(河)れ
ひぢりのみ(ハ)このれむすめはふつりとさくしを。兵(旬)
よるのゝやの小のゝ(中)にいづれぞとのゝへぞこれ(紀寺河)大(芸)
将兵のれのちのいをこりぢ(浮)らなるべしことく
こくもてなし給はざりけるをいうじくなるひ
給ちりぢ(大ノ身)じめれいるゝいうじうりきほどくすけ(出家)も

し給ひべりきしなどうたかか。(浮ん)れ口うりのし
うしきひとなりけるとうるまも。さすがおそろし。
(紀考詞)あやしくやうの物とうしこまて志もうを給けるか
こと。(きのふ)昨日もいとふびんに侍しれ。川ちきまて
(恙ノ)水とのぞきまて。いうじくなき給き。うへにのぼり
なひて。(ちら)捏にかきつけ給し
(恙)こし人いかげもとまらぬ水の上におちそふ
洞いとぐをきあへず。となん侍し。ことにあらりして
(恙ノ)の給ことはすくなけれど。こゝ乳色にはいと衰なり
れさ風になんこし給し。女はいうじくめでさて
まつりぬべくなん。まく侍し時より。いうにおりし

五 六十一

権僧正

ますらそまうりそこをしくば世中の一の所
もろはともしらぬしずなどみ山をとみ山とて
ろんなき結ぶめかとるを心もあけ
あるりやうの人ぐるはれありる海は雲りまうりと
ちよおまさびかきともしえん。故院のれ宥海
ま位えあるび給ひどともかゆかせ。こそは海の母ま。
このれぞうぞめぞうれ給ちるたの御心は海との給
へば。されいうちもいとまうしふらうしまちう
さくまそあ位ゐちるき海ぞう給へる。舟の家ぞ
いとうじく御しすかや。女まそうれつらまつる
かやとろん御心ち結ぶあかぞ。さらんやうま

いひけぐく。衰(浮ん)まもあしくもきくに。男の人も
この世のことも覚えず。とこ(笠)ろ得ることなくかうり
をきて出ぬ。口(蒸ノ)をれ(浮ん)給いぬとそいと衰ま出ぬまも
いとぐもしぶ君の此心の内をしまうれど。中こ
いふひなきき夜をこそ。ゆしこそまつんいな夜
いとつましくぞありけるか。此人(笠)のいひつけし
ことなどを。深(そめ)いそぐをうるまつけてもおやしく
めづらかるこちとれどかけてもいひ出されど。
こちぬひなどするを。これ(尼忘詞)ばんじいれよ。物を
いとうけくしくひもしせるまへばとそこうちきれ
ひとへこそまつるをうこそ(浮ん)おぼゆれば。心ちあし

そくをもふれずかしぬへり。おまぶいそぐことを
うちすてゝいぐ。ぬぼさりてあるぞ。ぬぐれ。詰。紅(くれなゐ)は
さくらのをりもれくうちきかきねて。此前(おまへ)はいかゝ
をそそこそまつしすべかれ。おきましきすまぞ先
なりやとゝふ人(ひとつ)

(浮)おまぶ衣かれ方まやありし世のことの
袖をかけて思ぶむ。とうきて(浮ん)いとおしくなくもなり
なんのちは。袖のかれおまき世なりかれば。さて何をも
などして。うと聞しきまでかくしけるなどや
しらんなどさ聞ぐ。しつ。すぎかしかゝのことは
こそ口をれ給ましとかやうなることをぬぼし

いそぐまつけてこそ。ほのまま衣なれとおほとかり
の給。尼宮詞 さりともおぼし出ることはおほかんを。しき
をすんぐて給こそこうろうれ。こゝまはかゝる世志
つゝの父あひなど。ひさしくますれまかれば。なをく
しく侍まつけても。昔の人おしましかばなど。忘出
えぐり。しろあつかひこそ給かんひと。世まおもす
らんや。尼宮ノ女ノ事 かくなくなりて。こ侍ぶる。なほいげこまか
あらん。そこまぐる。弱こさ夜ほしくおぼし侍りを。
もし来しこそ。しまれ給人ぐ侍らんかしとのまへば。
浮詞 うしほどまでいひ母ノ事 とりはもれし給き。このつきぐ
くもやしき給ぬらんとて。泪のおつるをまぎらはして

中々心出りまつけてうたて侍れバこそこゝしい
でね。急ぎてしたまぶしよりのそし侍らんとゝと
ずくちまるの給ちまし。つ。大将(苦心)はこのそてのまぎちまぎ
をさせみて。つ(苦心)ちまくてもやゝぬりれとあそれま
おぼして。彼(かれ)ひたち(浮ノきくな)のまどもハ。かう(元服く)ゆりしたりしハ。
蔵(六位く)べまちまし。ワガ此つきのぞうまちましちまどいる
ちり給ひり。ワらハちまりがちまりまさまげちまりをだ。
ちくつひちまらさんとおぼしたりけり。面ちまど
ゆりて志めやかちまり東。君(中宮)の宮ままいりぬへ里。
此まへのどやかちまり回まて此抽殿ちまど宮へぬふ
つゝでまおや(苦詞)しさ山里まきぜちりかちひこ

のへしを。人のそしり侍しもさるべきことそ。ハ
あしめ。これも心のうるゝのことハさるんあると
しのへなしつゝ。粗時ごゝ給へしを。前のさがまやと
心うくしのへなりまし後ハ。君もいるけき心ちし
侍て。ひさしくもれし侍しぬを。さいつころ抱乃
こゝのりまゝりて。かゝるき世の有様とりかさゝて
しのへしまことさら君心をうすべく。行くりとき
うりけり。ひだりのまこゝかとなんおぼし侍しと
けいし給まゝ。れこと(中家ん)おぼし出て。いとくおしかれば。
そこなおそろしきもれやすむとん。いやうまてゝ
れひ(涙)とはなくなりましとくいをのゝをなをうち

いぐさ（大と浮と）ころをおぼしよりうとせて、さも（詞）侍らん、
さやうの人だにあれ、ある所にはよりあれもれなんかれ
らずすゝつき侍らをうを侍しさ海なんいとあや
しく侍らとて、くもしく侍りて給ひ寺ぢ（中文山）後りく
思ぶりすぢをこそあらりしやりと也給りんがいと
おしくおぼされ、宮（句）の地をのこおぼして、その法
病（宮ひ）になり給しをおぼしあまりすりまも、こすぐま
ころぐるしくて、くるぐまくちいれまくき人の
うへとおぼしとぐめつ、小寧（中文詞）相に思びて、大（恙）ねかれ
人（ほ）のことをいと哀とせての給しまいとおしうて
うちおぼべりしかど、それにもあらざらんもの

ゆへとつくましらてなん。君ぞことぐさくあたを
けり。うたまちらんことはとりかくして。さりことなん
ありけりと。大方の地紙のついでに。僧都のいひし
ことかれとの給ひ。此まへぐまつまを給ふん
とせ。ましてこと人はいかでかとさてさすれど。
さ両ぐなりこまこそ。又丸はいとおしきことぞ
あるやとの給ひすりも。心えてありしとこまり。立
ありて地紙などし給ついでに。いひ出たり。君ぐら
まいりでかあやしとおどろかれ給はざらん。家乃
とちを給しもかうこと紙は此おぼしよりて
なりけり。などかの給ふをいつまじきとつらかれど。

我もまるさちじめりすしさ海のとゆれそめざり
しけ。ゆれてのちもなをおこがましき心ちして。
人ますべてもしさぬを。中々ほりまはさしゆるこ
ともおろんしうつの人ごの中にしのぶる
こゝぐるかれあり世中ハはなどもいりて。こ乃
人(寧和)にもさるんありしなどあしく給りんことハ我
ちをもき心ちして。(差詞)なをあやしとしし人のと
まてもすけり人のありさ海かれさてその人(俗)を我
おろんやとのこまへバ。(寧和詞)かれ僧都の山より出し日
なん。尼(あま)になりつゝいろじうつゞひし程にもこれ
人ありしてをさせざりしをさうじみのほい

かきよしをいひて。なりぬるさそ侍なりし
くといふ。所（芸ム）もかもしぎそのころの首稲などしあハ
すりは。こぶふぬしなれば。おことまそれとこぶ
出たんいとあきましき心ちもすべきかれいか
ぢかしうるきくべき。おりこちてこぶ。ありん
もかくなしなどや人のいひなさん。まるか此家（旬）も
罪つけ見えんには。必ばし出て。心（浮ノ）いりまかんな
もさ向こげ給てんかし。さて（旬ノ）さなの給ひそなど罪（伊文二）
をき給れば。まや。我には。さることなん罪じと。さるめ
づしきことを罪（きてゆ）名なぐらの給ちをぬまやあるかん。
家（旬）もかくづしひ給ひて。いとじう哀と心なぐらも。

更(きら)にやがて失(ゑ)にし物とせるして其やうなんうつし
べにしるりて末(すゑ)の世にハ黄(き)なる泉(ぞ)のほとりだりを
そのづくしくらひよりの風のまぎれもありなん。
物にさりゆしこむの心ハ又いかんじなど思ふぞ
けて猶の給ひずやあらんとおぼゆれどれかしこの
ゆかしかれば大(中文)宮にさるべきついでいかり出てゞ
けいし給あきましてうしなひ侍ぬとせ給へし人。
世にあちあづれてまやうる人のまもび侍しかれいか
でさりことハ侍らんとせ給れど心(ほ)とおぼろくしう
まてこちなることは侍しずやと。せいたり侍り人の
官様に侍れば人のたりて侍しやうまてハさるやう

もや侍るんとよつかもしくしぬへるしとて今
もこし寄て出のふ寄(句)のれことはいとまづしげに
さすがに恨(うらみ)さ夜にはいひなし給ひてかれこと(浮くり 恵詞)
まるさるんと寄(句ノ)つけのへらばかくなるすさぐ
しくもおぼされぬべしさしまさてあるりもしらず
がほにて過し侍るんとけいしのへばそうげ(中文詞)のかり
しにいく拙おそろしかりしよれことにてうくも
ぞめざりしことにこそ寄(句)はいかでか寄給ふん。さ
そんかるなりけり此心の程かれとさけばましてて
さくつけ給ひんこそいとくるしかるべかれ。かくらせ
ばよつけていとかろくうき拙にのこ世にしられ

ゑひぬれば心うくなんとの結句業をまさき流心
あれば必しも打とけ世がくりまでも人の思てけい
しけんをもしきを結びしながら浮をすゝめん
山里はいづこよりおもんばかりて遠あしらはず
都よらん。帝都にあひてこそへばうしなかる有遠も
さてあはれをなげて、さびしくもなるべくあれなど。
さびこのことをおもうて、あはれさて月かげれへ日は必
さうしたるわざをさせ給へば、薬師仏にようをたまる
ましてなしのへるころりに、中堂にまうで結句。
それよりやがて横川におはしまして坂本
とのわざはあそばす。其人々にはかたくきこえさせきゞ。

ま程まぞしるべくんとおぼをど打うじ夢の心ち
まも衰をもくるへんとまやをけん さすがなその人
とはうけなばしおやしきさ雨まうちことなり
人の中まてうきと寝つけたんこそいらじゃ
おべかれと弟まをまぐらおぼしこぶれけるまや

64038
6AP78